

ぐんま自治研ニュース

No.147

2025年8月31日発行

2024 年度

公開セミナー 第2弾

「命を守る防災セミナー」

～自然災害時あなたは動く～

講演 第1部 「未来を守る防災～気候変動の現実を考える～」

気象予報士 森田 正光

講演 第2部 「防災対策を Unlearn ～防災の当たり前の再考～」

群馬大学大学院理工学府 教授 金井 昌信

ディスカッション

『命を守る防災セミナー～自然災害時あなたは動く～』

コーディネーター・・・・・・金井 昌信

パネリスト・・・・・・森田 正光

パネリスト・・・・・・末永 正志

【司会】真下 亮祐（群馬県地方自治研究センター評議員）



目 次

1 公開セミナー 第2弾

- 講演 第1部 「未来を守る防災 ～気候変動の現実を考える～」
気象予報士 森田 正光 1
- 講演 第2部 「防災対策を Unlearn ～防災の当たり前の再考～」
群馬大学大学院理工学不教授 金井 昌信 10
- ディスカッション 22
命を守る防災セミナー ～自然災害時あなたは動く～
コーディネーター 金井 昌信
パネリスト 森田 正光
パネリスト 末永 正志

2 太田市社協の意識改革に取り組んだ五年

- 一般財団法人群馬県地方自治研究センター 理事長 黒澤 孝行 42

第 1 部 講演

「未来を守る防災 ～気候変動の現実を考える～」

気象予報士 森田 正光氏

【司会】 それでは、講演に先立ちまして、初めに講師の森田正光様の御紹介をさせていただきます。



森田様は 1950 年、名古屋市にお生まれになりました。財団法人日本気象協会を経て、1992 年、初のフリーお天気キャスターとなりました。同年、民間の気象会社、株式会社ウェザーマップを設立、親しみやすいキャラクターと個性的な気象解説で人気を集め、ニュース、バラエティー番組、ラジオ出演のほか、全国各地で異常気象などに関する講演活動、トークショーを行うなど、幅広く活躍を続けられています。

それでは、森田様、よろしくお願いいたします。(拍手)

【森田】 こんにちは、森田でございます。私、群馬県前橋とか高崎とか、とても縁があって、ニューイヤーズ伝ってありますね、1 月 1 日。あれで十何年来ていました。中継で、お正月元旦、今日はこういう天気ですとやっていたんです。

何度か、この近辺に講演とかにお呼びいただいて、本当にいつ来てもいいとこ

ろだと思えますね。天気はいいし、皆さんの人柄がいいし、いや、本当に。



今日は防災の話なんですけど、前橋とか高崎って、とても気象災害が少ないところなんです、実は。とはいえ、安全だというわけじゃないですよ。何が一番深刻かというと、暑さです。猛暑日というのがありますが、35 度以上の。それが四、五年前まで十数日というのが、去年、おととしとか 36 日ですよ、35 度以上が。そんな話は、この後、詳しくさせていただきます。

「気候変動の現実を考える」ということですが、気候で一番大事なことは天気です。天気がどう変わっていくか。短期ということなんです。



天気の基本というのは、実はこの「雲」という字に全て隠れています。もちろん、防災ということでは地震とかいろいろなことがあります。水害があります。熱波もそうですけれども。

天気ということに関していうと、一番の基本は、この「雲」という字をきちんと覚えましょうということです。簡単でしょう、「雲」という字。この「雲」という字が全ての基本です、災害の。

じゃあ、ちょっと見てみましょうか。

「雲」、この字、「雨」という字と、下からももやもやと上がってくる字が合体して「雲」ができます。「雨」と下から上がってくる字。「雨」は分かりますね。この「雨」という字、空から雨粒が落ちてくる形だから、誰が見ても、何となく想像がつく、「雨」という字。

じゃあ、これは。何を想像しますか。下からももやもやと上に行くという形ですね。読み方はどうということで、「うん」と読むといいですかね。にんべんをつけると伝えるという字。伝えるというのは、もやもやしたものを人にということです。だから、こう書くと、「云々（うんぬん）」でしょう。「云々（うんぬん）」というのは、もやもやという意味でしてね。だから、もやもやしたものが上に行くのと雨ができると、この字は言っているわけ。すごくない？ もやもやしたこの中に、目に見えないもやもや、もやもやって何ですか。水蒸気。



だから、ここに、例えば水をじゃーっと流すと、水は知らんうちに蒸発しますよね。その蒸発した水はどこに行っちゃったか。このホールの中では、この中にばーっと、水蒸気として、目に見えない霧になるわけです。それがもう1回冷やされると水として姿を現して、落ちてくるわけですね。だから、もやもやした空気、水蒸気となった水が空に行って、雲ができたよという意味になるわけです。これが基本中の基本。

だから、水蒸気がなければ大雨は降りませんね。水蒸気、もやもやが上に行くということはどういうことかという、例えばここに山があります。私が水蒸気。水蒸気がずーっとやってきて、山に当たりました。そのとき、山はどけといってもどいてくれへんから、この水蒸気は山の上を上がるしかありませんね。山の上を上がるということは上昇気流、上に行くわけですから。だから、夏の日差しの強い、ばーっと太陽が出ると、温かくて水蒸気が上のほうに、上昇気流、雨が降る。



だから、この字、何千年も前に昔の人が「雲」という字を考えたときに、よう分からんけど、とにかく空気が上に行くのと雨が降ってくるわけ、空気が上に行くほど雨が降ってくる。これが災害にも役に立つわけ。

どこが上昇しやすいのか、どこが上昇しやすいですか。こういう山があるとこ

ろじゃないですか、風が当たって。日本海側が高気圧に覆われたときに雪ばかり。なぜかといったら、日本海のほうから水蒸気をいっぱい蓄えて、山に当たって、上に行くから雨。だから、上昇気流が雨、下降気流が晴れ、この2つだけが重要です。線状降水帯、なぜといったら、線状降水帯は空気がどんどんそこに集まってきて、空気がぶつかると上に行くしかないから。それがずっと線につながって大雨が降る。こういうことなんです。

いいですか、だから、雲という上昇気流が雨だということが基本中の基本です。

上昇すると雲ができます。雲には磁気があります。

雲が10個あります。それぞれに名前がついています。これだけ覚えて、この雲。下ですごい雨が降っています。積乱雲です。この積乱雲だけが危険な雲です。あとは、いろいろな雲がありますが、これで雨が降ったりしますが、大した雨ではない。最も重要なのはこの雲、10種あります。見たことありますでしょう、それぞれ。ひつじ雲、巻雲、うろこ雲とか。この10種雲形を、一体誰がつくったのか。



まず、初めにおさらいすると、上昇気流が雨、下降気流が晴れ、上昇気流が危ない。上昇気流が雲をつくっています。

この10種雲形を誰がつくったのか。イギリスにルーク・ハワードという気象学者がいました。今から二百数十年前、

1770年か、七十数年、イギリスの気象学者ルーク・ハワードという人がいました。このルーク・ハワードは、これは大人になってから書いた記事なんです、ちっちゃいときに、すごい珍しい雲を見たんです。珍しいって、色がついている。何、この雲。ハワードは、1783年というときに、この雲は何だろうと思ってスケッチをした。それが、彼が30歳になったときに、イギリスの王立学会という学会があって、そこで「雲の分類」という有名な論文を発表する。それで、その雲の分類、雲は分類できるんだということが分かった。それまでも多少は、雲がいっぱいあるということは分かっていたけれども、分類したのはルーク・ハワードが初めて。1783年にルーク・ハワードは雲に興味を持ったわけですね。



これがルーク・ハワードが書いたもの、これ。いっぱい書いているんですよ、ルーク・ハワードは。その中の2枚を、これです。

原典はこれ。見たことないですか。積乱雲という雲で、この下は土砂降り。この積乱雲、ルーク・ハワードが興味を持った雲ですよ。

さらに、この雲の変種、これ。これも見てください。ずっと発達して、ここで黒い部分。激しい雨なんでしょう。これがいつの間にかわーっとむちゃくちゃに並ぶと大変なことになるわけ。撮影

は1個だけども、単独で一っと降ったら、大雨になるわけ。

この雲もよく見ますでしょう。この前橋ではよく現れるはずですよ。夏は特にね。この雲を遠くで見たら逃げたほうがいいですね。遠くというのは、数キロの中は、ばーんと稲光の射程距離ですから、逃げたほうがいいです。大雨が降る。こういうときは大気が不安定です。これはたまたま1個だけども、並んでいるやつがいっぱいありますからね。

そして、この雲だけは記憶に薄いと思いますので、今日は徹底的に皆さん、防災関連の基本を、防災のことを知っていただきたいと思って、忘れたくても忘れないものを持ってきました。

これ。千円札。何だろう、千円札。使うでしょう、1日に1回ぐらいは。最近、使わないですかね、スマホとかでやるけど。千円札、この千円札の裏。

この絵は何ですか。（「浪裏の絵」の声あり）



はい、そのとおりです。浪裏の富士、神奈川ね、浪裏の富士。富嶽三十六景のうちの1つ。これ、ここが、本物を皆さんお持ちですよ。後で、ここ確認してみてください。ここに丸があって、何も実は描いてないです。描いてないけど、丸があったら、デザインの的に、ここをカットしたんですね。

だけど、この富士浪裏の絵、富嶽三十

六景の浪裏の、ここが一番重要。ということ実画を持ってきました。実際の絵じゃないですよ。富嶽三十六景、北斎が描いた本物の絵のコピーというか、雑誌です。ここ見て。こんなところ皆さんにないでしょう。これ。これが、さっき言った積乱雲。だから、北斎はこの雲を知っていて、描いていたわけ。多少デフォルメがあるけれども、明らかに積乱雲です。だから、積乱雲ですから、ここで激しい雨とか降っています、この下では。だからちょっと暗くなっている。手前に富士山があつて。

富士山に雪が降って、雪が積もっている。これ多分、恐らく、僕の考えでは5月ぐらい。4月、5月のゴールデンウィークだと、結構雪があるんです、富士山。メイストームとか、5月に日本海に低気圧が来ると、発達した雲ができて、こんなふうに荒れる。もちろん、北斎は想定して描いたかもしれないけれども、こういう雲がある。

この雲。この下に。こういう雲を見たら千円札を見て、千円札を見たら大雨がここに描かれているんだということをいつも使いながら、大雨だ、大雨だと忘れないでしょう。あの雲。



これが葛飾北斎のお墓です。わざわざ見に行ったんですよ、私、ここに。浅草のそばの稲荷町という駅のすぐそばにあるんですが、ここに何て書いてあると思

いますか。「画狂老人」と書いてある。絵に狂ったお年寄りという。それで「卍」と書いてある。「卍」というのはお寺のことかな。そういうことが書いてある。

もう 1 回言いますよ。この北斎があの絵を描いたのは大体千七百……、さっきルーク・ハワードは 1783 年に、すごい雲に、色が変わって珍しい雲を見た。だから、ルーク・ハワードはスケッチすることをしたと言いましたね。1783 年。この浪裏が描かれたのは、大体その頃です。大体 1780 年代。すごく面白くありませんか。歴史の、ある意味、何ていうのかな、偶然ではあるけれども、面白くないですか。僕らは面白いと思う。気象をやっているやつは。

さらに言うと、1783 年、ルーク・ハワードが変だなと思った雲は、色がついた雲が、イギリスですよ。イギリスで色がついた雲が変だなと思ったルーク・ハワードが雲に興味を持った年、何があったのか。

天明の大噴火、浅間山。浅間山が噴火して、その噴煙がずーっと、太平洋を渡り、アメリカを渡り、イギリスまで行って、イギリスの空を染めたわけ。日本でも、例えばピナツボのとき、色がついて、変な雲が出たと有名になりました。

そのときには浅間山だけではなく、いろいろな火山が噴火していたんです。アイスランドの噴火とか、それで火山が噴火する、世界的に火山がばんばん噴火していたので、浅間山だけとは限らないんだけど、世界中、火山灰に覆われて、その後、実は 1780 年代後半にはフランス革命というのが始まりますね。フランス革命は火山の噴火で、もう気候が世界的に変になっちゃって、それで貧しい人たちがパンも食べられなくなった。それで王女様が、パンが食べられないならケーキを食べたらと言って、ひどい逸話があっ

て、それで革命が起きたという話があって、だから 1783 年の浅間山の噴火が、この 10 種雲形の、物すごい大まかな 10 種雲形の生み出しの、ちょっとしたきっかけになったかもしれないことなんですね。



さっき言った雲が何で重要かという、あの雲、もう覚えました？ 千円札の裏に描いてある雲、積乱雲。あの雲の集合が大雨をもたらす。あの雲 1 個で大体、もう本当に東京の 1 日分か 2 日 3 日分

くらいの水が優に入ってくるくらいの勢いで入っている、雲の中には。そういうようなところが幾つもできちゃうと大雨が起こります。

大雨というのは、階級があります。何ミリ降ったらどういう雨かという。30 ミリ、50 ミリ、80 ミリというふうに分けています。30 ミリは強い雨、50 ミリになると激しい雨と言います、気象庁で。だから、よく気象の、お天気キャスターが強い雨が降っています、強い雨が降っていますと同じことを言っていますね。あるいは、激しい雨が降っています、激しい雨が降っています、同じようなことを言うなと思うけど、あれは実は 50 ミリ以上の雨が降ると「激しい雨」というふうに言うようになっているんですね。たまには 50 ミリ以上とか言い換えたらいいと思ったりするんですけども、取りあえず 30 ミリだと強い雨、50 ミリが激し

い雨、じゃあ、80 ミリ以上はどういう雨。猛烈な雨といいます、気象の世界では、猛烈な雨。猛烈な雨というのは、恐らく一人一人の一生を考えて、80 年生きると 2 回か 3 回ぐらい遭遇しているかもしれないけれども、普通は数十年に 1 回ぐらいの頻度でしか当たらないから、一生に 2 回ぐらいしか遭遇しないような激しい雨、猛烈な雨のこと、80 ミリ以上の雨のことを猛烈な雨と言います。

その猛烈な雨というのは、あんまりないということは分かりました。あんまりない猛烈な雨が、今から 50 年ぐらい前から比べてどうなったかというのを、年によってももちろん変動がありますから、どうなったかを見た、どうなっていますか。

増えている。激しい雨。それがずーっと増えている。昔は凸凹があったけど、最近は毎年のように増えている。というのが、これはインチキでもなんでもなくて、明らかに増えているということが、このグラフで分かります。

じゃあ、どれぐらい増えているかということなんです。

日本には観測所がいっぱいあります。1,300 か所ほどあります、雨の観測所がね。そこで、例えばここで 100 ミリ降りました、ここで 50 ミリ降りました、普通のニュースは、どこどこで 100 ミリ降りました、そこがニュースになるけれども、じゃあ、どこで何ミリ降ったというやつを全部足したらどうなるのかといったのが、このグラフ。全部足すんだよ、全部。100 ミリ、100 ミリ、50 ミリだったら 250 ミリ、それも期間をちょっと長く取って、一連の大雨ということで、これは 8 月 11 日から 18 日の 1 週間。2021 年。

どこで何ミリ降ったのかを全部集めたら、28 万 8,698 ミリになりました。これ、すごいよね。28 万 8,698。120、120、50 ミリ、30 ミリ、80 ミリ、5 ミリ、10

ミリのところ、降っていないところもあります。でも、全部の雨を足したら 28 万ミリ以上になった。

28 万ミリ、これは気象庁のホームページから持ってきたものですが、そういう降水量を全部足した大雨がどれぐらいあるかを見たのがこのグラフ。

そうすると、4 万ミリとか 6 万ミリとか、この辺りの頻度が多いんですが、1 番、ここに書いてある。広島豪雨というのがありました。16 万ミリ。2 番、鬼怒川豪雨、これ覚えてます？ 電信柱にこうやってしがみついていたとか、そんなこともありました。鬼怒川豪雨。この辺りも結構降りました。3、北朝倉豪雨。4 番、西日本豪雨。



そして、さっき言った令和 3 年 8 月、2021 年。28 万ミリ。何が言いたいかわかりますか。大雨の規模が変わってきたということ。今までよりはるかにすごい大雨が降るようになった。何でですか。地球が温暖化することによって、水蒸気の量が増えました。温暖化ということは、海からどんどん水蒸気の量が増えます。海水温、今年もすごい高いけれども、水蒸気の量が増えるということは、その分だけ、それが上のほうに行って冷やされると雨になるわけだから、さっきの雲が目印。

水蒸気の量、つまり温暖化すると水蒸気の量が、大体 1 度で 8 % 増えると言わ

れていますから、増えて、それが雨になるので、この近年、大雨が増えているということになるんですね。

じゃあ、どれぐらい温度が増えているか、高いのかというと、これが1890年だから、何年ぐらい前、100年以上前ですけれども。

世界の年平均気温、経年変化、ずっとこういうふうに、2000年頃を境に温度の上昇が明らかに。よく地球は温暖化していませんという、地球温暖化懐疑論というんですけれども、地球は温暖化していませんという意見というのかな、そういうものが強まった時期があります。しかし、今ではそれはほとんど否定されていて、ほとんどというか、ほぼ完璧に。もっと長い目で3万年、10万年といたらどうなのと言われると、それはまたオーダーの問題だけど、少なくとも近年に限ってくると、地球が温暖化していることは紛れもない事実。温暖化しています。これがそのグラフです。特に2000年以降、1990年代ぐらいからですかね、本当に気候が変わってきて。

異常気象という言葉があります。異常気象というのは30年に1回の出来事を異常気象といいます。30年に1回。ところが、30年に1回のことが、5年で起きたり、毎年のようにというのとあれだけれども、3年で起きたりとか10年で起きたりとか。そうしたら、どう言います？ 異常気象というのは英語で Unusual weather というんですけれども、もう本当に日本では30年に1回の出来事が毎年のように起こったら、それは異常気象じゃない。全体の雨の量が、気温が高いとか、ずっと今までは30年に1回、ばーんと突出したのが、毎年のように上がるから、それはそのままステージが変わったこと。

だから、こういうものを我々は、気候変動と言います。だから、異常気象と気

候変動は、厳密に言うと言葉の意味が違います。異常気象は30年に1回ぐらい、まれに起こること。気候変動は、それが常態化し始めているという、そういうことです。今、その気候変動が起き始めているんじゃないかというのが、全体の、気象庁も含めて、考え方なんですね。

そういう意味でいうと、ここら辺2000年ぐらいから、ずっと著しく上がっていて、ここ、前橋にもアメダスがありますけれども、温度が上がっています。特に著しく上がっているのが、地球全体では、この100年で1.2度ぐらいなんですけれども、東京に関していうと3度以上上がっている。東京、都市気候というのもあるんですが、都市特有の気温の上昇もあるんですが、東京だけで異常に高いんですよ。



温度が上がって、水蒸気の量が増えていくと、それに関連して、当然、大雨が多くなるわけですから、災害も増えますね。災害が増えるときに、どうしたらいいのかということで、この後、ディスカッションのところでもお伝えしたいと思いますが、まず、我々が防災で心がけなきゃいけないのは、正常性バイアスといいますけど、自分だけは大丈夫だと思うこと、これが一番まずいですね。それはそうだよ。毎日毎日やっていると、自分だけ毎日、よくこういうこと聞いたことありません？ 震度7の地震があったとき

に、10 分後に、あなたは何をしていると聞くと、100 人中九十何人が、10 分後に何をしているという、いや、私は多分家の中で避難しているとか、どこどこにいるかもしれない、ここに来ているとか、震えているとか、そういう意見なんです。



だけど、震度 7 の地震があったときに、10 分後に何をしているというときに、自分が死んでいるということを誰も想定しないわけ。それはそうですよね。そんなことを考えていたら生きていけない、毎日ね。でも、それが正常性バイアスということ。自分だけは生きていと思うちゃう。震度 7 というのは、最悪だったら、ここは大丈夫だと思うけれども、そんなに頑丈な建物じゃなかったら潰れている可能性だってあるし、それから、何が起きているか分からない。だけど、自分がそこにいない、存在しないということは、つゆほども考えない。これが正常性バイアス。

ただし、そういうことが起こり得るということばかり考えていると、杞憂といいますけど、空が落ちてくるんじゃないかということばかり考えていると生きていけないから、人間の体の中に、人間の頭には正常性バイアスという、とにかく自分にいいこと、自分の周りの事件をできるだけ排除したいということを脳が、人間の脳って、やっぱり面倒くさがりやだから、あまりそういうことを考えたく

ない。だから、自分だけは大丈夫と、そもそもそんなことを思わないというのが正常性バイアス。だけど、そういうふうにバイアスがかかっているということを一応覚えておけば、「何が起きても大丈夫」は、いいと思います。

ちょっと、これも思い出したんですけども、昔、こういう講演会をさせていただいたときに、ある方から、天気というのは変えられない。あした雨が降るときに、雨を変えられないじゃないか。だったら天気予報なんか必要ないんじゃないと言われたんです。

それはそうだ。あした雨が降ることが分かっている、その雨が分かったって、自分自身は天気を変えられないから、どうしてもできないから、そんな天気予報要らないじゃんと言われたことがある。

それで、なるほどなと思いながら、終わってから考えて、何で必要なんだろうと思ったときに、確かに天気そのものは変えられない。それから、地震が来ることも予知できない。浅間山が噴火することも、あと 100 年ぐらい大丈夫だよと言われていても、まだ安心ができない。分からない。

いろいろな行動について、あるいはその噴火は変えられない。変えられないけど、じゃあ、何が変えられるかというと、その情報を持っているかどうかで、自分の行動を変えられるんですね。あした雨が降るといえば、今日買物に行こうとか思う。あした雨が降っていると思えば、今日中に行動すればいいわけですよ。だから、天気は、あるいは気象災害とか地震とか、そういうことも止められないけれども、自分がどうするかという、その情報を知ることによって行動を変えられるというメリットがある。行動を変えることによって、自分の命を助けたり、

自分の周りの人の命を助けることができるんですね。

だから、自分だけは大丈夫というのではなくて、正常性バイアス、そういうバイアスがあって、何か起こったときにはこうしようという頭の中でシミュレーションをしているだけで、全然違う結果が見えると思いますね。

あと、多数派同調バイアス、これもよく言われるけど、みんなと同じ行動をすると安全だというのとちょっと違って、災害時にはできるだけばらばらに行動したりとか。ばらばらって何か。いいかげんにということではなくて、同じところに集まるよりも、例えば火事だったら違うところに逃げたりしたほうがいいわけですよ。だから常に、みんなが、大勢の、こっちが大丈夫だ、こっちのほうが正しいとかいっていると、そうじゃない。やっぱり、そのときだけは脳みそというのは、怠け者かもしれないけれども、取りあえずはこれが最善だろうかと、自分一人の頭で考えることが大事なのかなと思いましたね。

そして、最後これです。

これも多分いろいろなところで言われると思うんですけど、「自分の命は自分で守る」という。何か冷たそうに見えるけれども、結局はそういうことです。自分と自分の周りの人を助けると、その人からまた広がって行って、助かる命が増えていくということで、この3つが防災の肝になる言葉だろうなと思っています。

温暖化について、どうしたらいいのかということで、私たちにできることという提言。今日、防災関連なので詳しくお伝えするのもなんですけれども、1つだけ言えるのは、環境問題を知った人に伝える、今日これから防災のことを、千円札のこともそうですけれども、そういうことをできるだけ人にちゃんとした情報

を伝えるということと、あと個人個人、一人一人ではどうしようもできないことがあるので、それを大きなうねりみたいな感じにして、環境に配慮した企業を応援するとかですね、こんなことが大事ななと思います。



最後にまとめですが、どうしても今日、覚えておいていただきたいのはこれです。もうこれに尽きるといっても、千円札。特に高崎、前橋、この辺り、また夏以降、激しい雨が降ります。これ、分かりますね、積乱雲という雲ですけど。

この千円札で終わりたいと思います。

ということで、どうもありがとうございました。(拍手)

【司会】 森田様、大変貴重なお話ありがとうございました。人柄、ユーモアを感じるような、やっぱり改めて森田さんのお天気いいな、なんて思ってしまうお話でした。

やっぱり災害時に、森田様のお話の中にありましたけれども、自分は大丈夫と思い込んでいることはよくないです。自分自身の行動を変える、天気、災害は変えられないけれども、自分自身が自分事として変えていくことが大事なんだと、私も袖で聞きながら痛感した次第でございます。

第2部 講演

「防災対策を Unlearn ～防災の当たり前の再考～」

群馬大学大学院理工学不教授 金井 昌信氏

【司会】 引き続きまして、この後は、金井昌信様に御講演をいただきます。

金井様の御紹介をいたしますと、金井様は群馬県桐生市の御出身で、群馬大学大学院理工学府の教授として活躍されています。災害社会工学を専門に、災害犠牲者ゼロを実現することを目的に実践的な研究を行っており、地域住民が地域独自の緊急避難方法を策定する取組や、小中学校における防災教育の支援などに御活躍をされております。

それでは、金井様より御講演をいただきます。金井様、よろしくお願いいたします。(拍手)



【金井】 改めまして、皆さん、こんにちは。御紹介いただきました群馬大学の金井と申します。このような機会をいただいて、本当にありがとうございます。

私からは、今回の命題の「自然災害時あなたはどう動く」に対して、防災の視点でお話させていただきます。先ほどの森田さんの講演の中でお話されていた天気予報は、災害情報になります。災害に直結する情報です。防災は、災害が起こっ

たときにどうやってその被害を防ぐか、減らすかということに直結する情報だったりとか、行動になります。災害情報が発表されても、行動することができないと被害を減らすことはできません。そのため、実際にいろんなことが起こったときに備えて、今何していくか、災害時にどう動かなきゃいけないのかと、そのような話をさせていただければと思っております。よろしくお願いいたします。



私は防災について、いろいろなところでお話しさせていただくことがあるのですが、分かったことがあります。

それは、仮にこの会場で熱心に、うんうんとうなずきながらお話を聞いていただいたとしても、話が終わってこの会場を出て、御自身の車に乗る頃には、ほとんどの人は、私の話の8割は忘れていきます。あしたの朝になれば9割、何ならもう夜までに、晩酌をやれば100%忘れていきます。

なので、このあと小難しい話をさせていただきますが、まず最初に、これだけ覚えておいてねという話を2つさせてい

たきます。

最初にお話ししたいことは、今の防災に一番必要だと私が思っていることです。そして、防災以外の面でも、皆さんのふだんの生活の中でも使える考え方だとも思いますので、紹介させていただきます。

本日、皆さんにお伝えしたいこと

アンラーン*

Unlearn

これまでに身につけた思考のクセを取り除く

“当たり前”と思っていたことを再考してみませんか

*柳川 範之・為末 大：Unlearn(アンラーン) 人生100年時代の新しい「学び」など

Unlearn という言葉です。learn は、学ぶという英語の動詞です。それに否定の un というのがついている言葉です。そのまま訳すと、学ばないとなるんですが、そうではありません。幾つになっても学ぶ姿勢というのはぜひ持っていたきたいので、学ばないではないです。

この考え方を提唱されている方々によると、日本語にする場合は「学びほぐし」と言うそうです。

我々はいろんな分野で働いたり生活していたり、いろんな組織に属したりしています。そういういろんな分野で、経験だったり知見を積み重ねていくと、何か類似のことが起こったときには、その分野独特の習慣だったり、文化だったり、考え方に基づいて、物事を決めたり、すすめたりすることになります。つまり、これまで身につけてきた考え方の癖みたいなものがそれぞれの分野には存在します。あまりよくないときに使われることが多いかもしれませんが、前例主義は、まさにこの典型的かなと思います。

今まで考えてきたような思考の癖に基づいていろんな行動をすると、意思決定

が速いという利点があります。すぐ何しようかと決めやすいです。

しかし、これまでのように行動していても、問題が解決しないこともいっぱいあるんです。今までのやり方の延長で、こうだったからこうしておけばいいみたいなことが、世の中には山ほどある。少子高齢化なんて最たる例じゃないかなとは思ったりするわけです。

防災も、私は全く同じだと思っています。ずっと同じようなことをやっているんだけど、本当にそれで本質的な問題解決できるんですか。多分できないんじゃないかと思います。そこで、何らかの問題、課題にぶち当たったときに、今までその分野で当たり前だと思っていたことを、そのまま踏襲するんじゃなくて、1回立ち止まって再考してみる、というのが、この Unlearn という考え方だそうです。

今日は、この言葉を覚えていただくとともに、この後の私のお話では、日ごろから皆さんが何となく大事だと思っている防災を、一緒に考え直す機会にしていただければと思います。

覚えておいてほしいことの2つ目は、防災についてです。それは、災害対応、防災対策など、防災にかかわることには、



唯一絶対の正解はないということです。

当たり前を再考しましょうというのを先ほど申し上げました。だからこの後私がお話しする話は、皆さんの考え方に基

づくと、ちょっと違うんじゃないという話もいっぱい出てくると思います。それはそれで構いません。私に洗脳される必要はないです。

まずは、おことわり

防災に『唯一絶対の正解』はない！

(ただし、不正解はある)

居住地や個人属性によって、適切な対応は異なる

⇒あなたに適した対応策は、あなたが考えるしかない！

個別具体の知識のご提供には限界あり (安易に答えをもとめないで...)

多様な価値観、考え方があってよいはず

⇒あなたにとっての正解が、他の人の正解とは限らない！

気付いていただくことを重視 (都合よく解釈しないで...)

なぜならば、これだという唯一絶対の正解なんてないと私は思っているからです。皆さんの考え方で防災は進めていただいて結構です。だからこそぜひお願いしたいのは、唯一絶対の正解はないということだけは同意していただきたいです。ただし、これはやっちゃ駄目という不正解はあるんですけどね。



理由は2つあります。1つ目は、自然災害と言われるものは、住んでいる場所によって、そのリスクの程度、種類が変わってきます。なので群馬県に住んでいる我々は、大きな地震が発生して、津波が来ることまで想定した備えというのをする必要は、そんなにはないはずですよ。これが海沿いだったら話は変わりますよね。

同じ大雨が降っても、山の近くに住ん

でいて、山が崩れるというところであれば、土砂災害のことを考えなきゃいけない。平地に住んでいれば山はないですから、山が崩れる心配をする必要はない。川の近くに住んでいたとしても、その川のため込める水の量によって、3メートル、5メートルと深くつかる場所もあるとなってくると、備え方は全然違いますよね。

そして、備えるというのは誰がやるかということ、各個人がやるわけです。そのため、備えや災害時の行動は、各個人のその能力、資質によって変わります。健康者であれば、何かあったらすぐぱっと自分で動けるので、避難の準備も少なく済むでしょう。これが御高齢になって足腰が弱くなってきた方だったら、話しは別だし、そもそも障害を持たれている方、乳幼児の方なんていうふうになれば、備え方は変わって当然ですよ。

そういうのをひっくるめて考えると、自分自身に合った備えについて、自分はこれが大事だと思うという考え方を持つのは大事ですけど、それを人に押しつけるのは違うんじゃないですか、それぞれが備えるべき内容は変わってきますよねというのが、1つ目の理由です。これはよく言われる話です。



もう一つの理由は、他の人はあまり言わないんですけど、私はこっちを、ぜひ群馬県民の皆さんには強くお勧めしたいと思っています。防災は、しょせん自然災害という、生きていく上で、もしかしたら起こるかもしれないことに対する備えです。絶対起こるわけじゃないんです。我々人間にとって、生物にとって絶対起こるのは死です。いつか何かしらの可能性で必ず起こるんですけれども、その日を迎えるまでに必ず自然災害に遭うかというそうではない。起こるかもしれないことなんです。

そうなってくると、起こるかもしれないことに対して、一体どれだけ皆さんのふだんの生活の中で貴重な限りある時間、金、手間、こういったものを使えるかというのは、人によって違って当然じゃないですかと思うわけです。

お仕事されている方であれば、日々大変なお仕事を抱えていて、今が大変なのに、起こったときのことなんて、どれだけ考えられるのか。同居している、もしくは別居している、年を取った両親が、介護が必要になって、誰が面倒を見るのみたいなことを考えることもあるでしょう。子育てしている世帯であれば、毎日あれこれ考えてやらなければならないことがたくさんあるはずです。

そういうふだんやらなきゃいけないことがいっぱいの中で、どこまで備えられるかというのは、個人によって違って当然じゃないですか。今日食べるのも困っている人が、災害に備えて3日分の水、食料を用意しておけて変じゃないですかと思うわけです。

となってくると、このどこまで備えられるかという、その物理的な条件だけじゃなくて、災害というものに備える、その物の考え方、価値観によって、正解は変わってきてもいいんじゃないですかと思

うわけです。

ただし、考えていただきたいのは、実際起こってしまったら、ふだんの生活はできず、とんでもないことになります。どんな災害が起きても今と同じレベルの、ふだんと同じレベルで不便のない生活を送りたいんだというのであれば、それに見合う備えをすることが、その人にとっての正解になります。



しかし、多くの人が犠牲になるようなすごい災害が発生した場合には、被災後1週間ぐらいは、ふだんよりもぐっと不便な生活を送っても、取りあえず死ななきゃいいやというふうに覚悟して割り切れるんだったら、それに応じたそこそこの備えをすることがその人にとっての正解になります。ただし、それによって生じる、ふだんからは考えられないような不便は覚悟して受け入れてもらうことも備えに含めなければならないと思います。

災害の備えというと、いろんな人が、これはお勧めグッズですよ、あれを考慮しておきましょう、これをやっておきましょうとか言うんですけど、そんなことをやる前にまず我々がやらなきゃいけないのは、そういう災害に備えて、一体どこまでの被害を防ぎたいのか。逆に言うと、どこまで不便は覚悟して受け入れることができるのか、という覚悟のレベルを決めるというのが一番先にやるべきことではないでしょうか。

災害が起きも不便になりたくないですというんだったら、高いレベルで備えてください。死ななきゃいいやレベルでいいのであれば、そこそこのレベルの備えでもいい。ただし覚悟はしておいてくださいね。この覚悟のレベルを決めるというのが、災害の備えで、まず我々が一番大事なんじゃないかな。

これを何で群馬県民にお勧めするかというと、災害が起こると思っていない人が、とても多い県民性だからです。実際に大きな災害が発生していないので、なかなか身近にそういうものの危機を感じることがない。これは当然です。

今まで、そういうあまり起こらないことに対して、意識を高く持つことを促して、いざという時のためにしっかり備えることを促してきたわけですが、そのやり方で備えられないのであれば、うちの家族の様子に鑑みて、最低限どこまで備えなきゃいけないか。ここまでやって、あとはしょうがない、我慢しよう。そういう備え方、考え方のチェンジがあってもいいんじゃないですかというのが2つ目の理由です。

この2つ目の理由は価値観の違いもあると思いますので、皆さん全員に絶対そう思えとは私は言いませんし、そうあるべきだとも言いません。。唯一絶対の正解はないので。でも、あなたの正解が必ずしもほかの人の正解にならないというのが、防災、災害への備えの、もしくは自然災害、災害行動対応の難しいところの一つなんじゃないかなというのは、御理解いただければと思います。

それでは、ここからは、防災に関して、なんとなく皆さんが当たり前だと思っていることについて再考していただきたいことをお話したいと思います。

1つは、防災大事という、考え方です。これだけ毎年のように大きな自然災害が

発生すると、多分多くの日本国民は、防災は、日本が考えなきゃいけない社会課題の一つだと認識されているんじゃないかなと思います。

例えば、昨年1月1日に、能登で大きな地震が発生したんですけれども、皆さん、知っていますか。知っている人は挙手をお願いします。皆さん、知っているんですね。おそらく大きな被害が出たことも、テレビ、ラジオ、インターネット等を通じて、皆さん何らかの情報を得ていて、知っているんだろうと思います。



あのような大きな災害が発生すると、マグニチュード 6.9 ぐらいの直下型地震は日本全国どこで起きてもおかしくないですよ、といった情報もニュース等で伝えてくれるんです。また各家庭で3日分の水、食料を用意しておけとか、災害に備えて持ち出し品の準備をしておけとか、備えに関する情報も伝えてくれるんです。

『令和6年能登半島地震』に思うこと

震度7の地震は『別物』

最大震度7を観測した地域がある地震による被害は、それ以下の地震と比較して被害が段違いに大きくなる

よく言われている備えは『別物』には通用しない

地震による犠牲者をゼロにすることには限界がある
どんなに備えていても、被災後の不便を減らすことには限界あり！

皆さんにとっての別物（震度7の地震と同レベル）とは？

ほとんど発生しないかもしれないが、発生した場合にはどうにもならないことを覚悟すべき！

ていしや、官さんりやんこ備えしいよ

すか、と聞くと備えていなかったり、いい加減な備え方をしていたりするわけです。つまり、何となく防災は大事と思っているだけで、やった気になっている。本気で考えていない、というのは、最大の課題の一つかなと思います。

そして、次の再考ですが、これは真面目な日本人の気質が出ているんだと思うんですけど、防災を考えようといったら、あれもこれも全部大事で、全部やろうとします。

災害が起こって一番最初にやらなきゃいけないのは、自分の命、家族の命、命を守ることです。生き延びた後に、ぐちゃぐちゃになったまちの中で、ふだんの生活ができなくなるから、被災後に備えていろんなことを準備しておかなきゃいけないわけです。最後にそこを乗り切ったら、瓦礫の山になったまちを元に戻すために、ごみの処理とか、生活再建とかを考えることになります。防災をやろうとすると、これらを全てやらなければならないように思っている人が多いのではないのでしょうか。

ここで考えなければならないのは、これらの備えや対策には、優先順位が存在することです。死なないための備えが最優先されるべきなんです。なぜならば、被災後の備えをどんなに頑張っている、災害で死んじゃったら使えないんです。だから3日分の水、食料を用意しましょうとかやっている人が、おうちで本棚とかたんすの固定もしないで生活しているって、優先順位変じゃないですかと思うわけです。せっかく用意しておいたのを使わずして、あちらの世界に行っちゃいますよということです。

あれもこれも大事な中で、優先順位が間違っちゃっていませんか。災害報道とかでよく取り上げられるのは、被災後、不便な生活をしている方の様子です。そ

のため、災害が発生するとあれこれ不便が生じることは多くの人が容易にイメージすることができます。だから避難生活の備えに力を入れている人が多くなります。死なないための備えが最優先なのに、災害で死なないことが前提になっているかのように、この備えがないがしろになっていることが多くないですか。

そして、3つの再考は、「防災意識を高く持って災害に備えましょう」という防災対策のあり方です。日本ではここ20年くらい、自分の命は自分で守る、防災意識を高く持って、日頃から災害に備えましょう、みたいな標語をずっと使ってきました。

これによって確かに備える人は増えたと思います。しかし、現在備えられていない人に対して、この先何十年、この標語を唱え続ければ、備えるようになるのでしょうか。今備えていない人が備えるようになるって、残念ながら、その人が痛い目を見たときしか、もうないんじゃないと思っちゃうわけです。

とすると、ちょっと違うアプローチ、違うプランが必要なんじゃないでしょうか。私なりの私案があるので、ぜひ皆さんに、少し具体的に、すぐに行動を変えるためのヒントになるようなことをお話ししたいと思います。

直近の事例になりますけれども、昨年1月1日に能登半島で大きな地震が発生して、241名の方が災害直接死でお亡くなりになりました。大きな地震が発生して、建物が崩れて下敷きになって亡くなった方、山が崩れてきて巻き込まれて亡くなった方、津波にのまれて亡くなった方、火災に巻き込まれて亡くなった方など、最初の大きな揺れに起因する現象で亡くなった方を直接死と言います。

今、能登半島地震の犠牲者数を調べると、約500人になっています。これは災

害関連死という、被災後の生活の変化に耐えられなくなって、もしくはその生活の変化が原因になって亡くなった方が、280人くらいいらっしゃいます。



ここで地震について、この能登の事例を基に、ぜひ皆さんに考えていただきたいことを3点御紹介したいと思います。

1つ目は、震度7を観測する地域が出てしまった地震は、それ以下を最大震度、つまり震度6強を最大震度とするような地震とは、別物だと腹をくくったほうがいいんじゃないですかということです。

1995年の阪神・淡路大震災をきっかけに日本の地震の揺れの大きさは、震度1、2、3、4、5弱、5強、6弱、6強、7というスケールで計測することになりました。30年前です。

ここから震度7を観測する地震というのは、一連の地震を含めれば6回になります。1995年の阪神・淡路大震災、2004年の新潟中越地震、2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震、2018年の北海道胆振東部、2024年の能登半島地震の6回です。これらの地震によってインフラ施設が大きな被害を受けるとともに、多くの方が亡くなっています。

一方で、最大震度6強という地震になると、発生数は倍以上になりますが、亡くなった方も確かにいるんですけど、震度7を計測した地震と比較するとぐっと被害は小さくなります。まちもぐちゃぐ

ちゃになってライフラインが止まったといっても、今の日本の地震対策の十分な安全性を確保した街の構造をしていると、比較的早く復旧、元に戻る。

でも震度7だけはどうにもならないんです。なので、地震が発生してすぐにテレビをつけて、震度7を計測した地域があったと速報がでたら、これはもう駄目だ、別物だというふうに、もう腹をくくっちゃったほうが、備えとか、その後の対応をすぐに開始できるのではないかなと思うんです。

2つ目。そういう別物と言われるような、とんでもない災害が発生した場合、よく言われている備えは通用しないんじゃないですか、ということです。

ここからは、話ばかり聞いていると眠くなるので、ちょっと参加型でやらせてもらいます。よく言われている備えって何かを一緒に考えてみましょう。

各世帯の災害への備えとして、よく言われるのは、3日分の水、食料の備蓄だと思います。最低でも3日分、最近は努力目標、1週間分用意しておいてくださいなんていうのをよく言われます。水は1人1日、2リットルから3リットルとされています。

せっくなので御協力ください。3日分の水食料を備蓄しておくことが求められていることを知っていたという方、挙手をお願いします。ありがとうございます。やっぱり。土曜日のお休みを使って防災の話を聞きに来るだけあって、よく手が挙がっていました。

多くの方は知っていたんですね。でもよく見ると、手が挙がっていない人はまだいます。そんな人でも能登で大きな地震が発生したことは知っていたんですね。あの地震についての報道で、さんざん言っていましたよ、テレビで。各家庭3日分の水、食料、それから家具の固定、

耐震補強ぐらいはやってくださいねと。残念ながら被災地の強烈な映像は記憶に残っていても、そういった備えなどに関する情報は興味がないとスルーされてしまうんです。大きな災害は度々発生しますが、同じことの繰り返しなんです。何を備えるべきかを知ってもらわなければ、備えられないので、まずは知ってもらう必要があるわけですが、あれだけ大きな災害が発生して、多くの人がそれに関する情報を見聞きするのに、備えの情報は浸透しない。もっとちゃんと見てくれと言いたいです。

“避難”に関する課題

■ 知ろうとしないし、考えようもしない

- ・地域でどのような災害の危険性があるのかは、HMなどで公表済み
⇒「知らない」のではなく、「知ろうとしない」ことが問題！
- ・避難に関する情報は、災害報道などからでも簡単に手に入る
⇒「わからない」ではなく、「考えようもしない」ことが問題！

■ 「わかつちやいるけど・・・」ではなく、 『わかっていても難しい』

- ・刻一刻と状況が変化する中で「今がそのとき」と決断するのは困難

じゃ、かなりの方が知っている、という事で手を挙げていただいたんですけども、お聞きしますね。ちゃんと備えていますか？備えているという人は手を挙げてください。確実に上がっている手が減っていますよね。ありがとうございます。

知っているけど、できていない。これが災害の備えの最大の課題の一つなんです。分かっているんですよ。分かっているけどできていないことに対して、意識を持って備えましょうと言ったって、何の解決にもならないんです。

では、この問題をどうするのか。大丈夫ですよ、安心してくださいね。やらなきゃいけないことができていないことに対してねちねち言うつもりはありません。そういうことを言う人は、世の中で嫌わ

れるんです。だから、分かっているけどできていないということに対して、ねちねち言いません。

そこをねちねち言わないので、今日は再考してほしい、考え直してほしいんです。次に皆さんに聞きたいのはこれです。本当に自宅にないですか。

3日分の水、食料を用意しておけと言われていていることを、本気で考え直してみてください。能登半島地震のような災害が発生すると、電気、水道、ガスが止まって、道路がぐちゃぐちゃになっています。つまり、被災したところにいらっしゃる皆さんには物が届かないんですよ。だから3日間自力で生き延びてくれと言っているんです。3日たてば、今の日本の仕組みであれば、被災地の多くの場所に何らかの支援が入れるので、3日は生き延びてくれと言っているんです。

じゃ、そういうとんでもない状況での3日間、皆さんはどういう生活をしたいですか。電気、水道、ガスが止まっていて、コンビニに行っても何も買えない。この状況でも普段と同じように温かい夕飯を食べたい、晩酌したいというのであれば、それに見合うとんでもない量を備えて、準備してください。

でも、そんな状況であるならば、3日間飢え死にしなければいいやというレベルまで覚悟をもつことができれば、準備する量はぐっと減るわけです。これがさっき言った、覚悟のレベルを決めるということです。

どうですか。この高いレベルがいいですか。生き延びられればいいですか。生き延びられればいいというレベルで考えてみてください。本当に自宅にないですか。今日この会場にいらっしゃるときに、自宅から来てこられた方が多いと思います。ここに来る前、おうちの様子、同居している家族を頭に思い浮かべてください。

今うちにある飲物、食べ物で、家族が3日間生き延びられるんじゃないかなという方、どれくらいいらっしゃいますか。



はい。おかしい。さっき全然手が挙がらなかったのに、みんな手が挙がりました。何となくしか考えていないからそうなるんです。

5年間長期保存できるお水とか、お湯を入れて10分、15分たてば温かい御飯になりますみたいな何とか米とか、災害時の備えといえ、こういったものがすぐ出てくるんですけれども、これじゃなくてよくないですか。うちにあるものを工夫すれば、3日間家族は生き延びられるんじゃないですか。

そういうのをやってくれと言っているのが、ローリングストックという備え方です。

どうですか、皆さん、サザエさんちみたいな生活を送っていますか。サザエさんちってどういう生活を送っているかというと、サザエさんとフネさんが、毎日お昼を食べたら、その日の夕飯と朝食の分の食材を、近所の八百屋さんと魚屋さんとお肉屋さんに行きこんです。だから夕飯を食べて朝食を食べると、うちの中に食べ物なくなるんです。で、また翌日買いに行きこんです。毎日買いに行く。昭和の古き良き生活がそのまま残っているわけですけど。

していないでしょう。どうせ週に1回

か2回、でかいスーパーに行って、カートを引きずって、何なら自分一人では引けないからといって、御主人を連れて行って、カート2台体制で、上下、籠を2つどころか4ついっぱいにして、1週間分ぐらい買い込んだりするわけじゃないですか。工夫すればうちにいっぱい食べ物を残せるんです。

例えばあまり健康によくないですけど、私が大好きなカップラーメンを夜食用に取っておきましょう。最初10個買ってきます。10個食べ終わって、次に買いに行くと、食べ終わったときに災害が起きるとないです。だから5つ食べたら5つ買い足しましょう。いつもうちに5つ残しておくようにしましょう。

カップラーメンは、よくこういう例に出るんですけど、あれは水が必要なんです。温めないで作ってもまずいです。お湯にしないと。そうすると手間がかかる。であるならば、ツナ缶でよくないですか。ツナ缶3つ、つながっている缶、あれを3パックぐらい買ってきておきます。2つ食べて、残り1つになったら2つ買い足す。

魚肉ソーセージとかはさらにいいですよ、ぱっと開けてすぐ食えるから。最近小学生とか小さい子で、よくソーセージが嫌いとか言っているんですけど、十分ですよ。食べられるようにしておく。

ふだん平日、居間でテレビの番をしている御高齢の方も多いと思いますが、いつもおせんべいを食べている。あのおせんべいを大量購入しておいて、全部食べる前に買い足せばいい。

さらに昔はお客が来たときにはお湯を沸かして、ちゃんとお茶っ葉で急須にお湯を入れて、はい、どうぞと出していたのも、だんだん高齢化が進んで、お湯を使わせるのは危険だからといって、お客が来たら、はい、どうぞとペットボト

ルのお茶を入れるみたいに、生活スタイルが変わったおうちもあるんじゃないかなと思うわけです。そうであれば、2箱で買ってきておいて、1箱終わったら買い足すようにすればいい。

このような買い方を習慣にすることができれば、防災意識なんていらずに、うちの中に物を残すことができるようになるんです。ふだんの生活の習慣をちょっと変える。

しかも無駄な金を一切使っていない。どうせ消費するんだから。となると、多くの人が当たり前だと思っているこんな高いレベルの備えじゃなくてもよくないですか。しかも本当にそれが必要なのかもよく考えないで、周りが言っているからという理由で、できもしない備えを大事だと思っているだけなのであれば、考え方をがらっと変えてみたらいいんじゃないかと思うわけです。

他の例もあります。例えば非常持ち出しバッグの中に、笛が入っていますよね。考えてください。あり得ないでしょう、その備え方。だって生き埋めになったときに笛を吹くんですよ。それにもかかわらず、リュックを入れて押し入れの中においたら、地震が起きたときに使えるんですかね。ぐちゃぐちゃになった家の中を押し入れまで行って、そのリュックから笛を出してピーと吹く。そこまで動けるのであれば、笛はいらないですよ。そういうのがいっぱいあるので、気をつけてくださいね。

さて、話を戻しましょう。よく言われる備えである3日分の水、食料、持ち出し品をちゃんと考えて用意しておいたとしても、震度7の地震のような別物の災害が発生した場合、それはどれくらい不便を減らすことに役に立つのでしょうか。大きな災害が発生し、その被災地で避難生活をしようとしたら、不便な生活は3

日、1週間じゃ済まないんです。1か月、2か月と長い期間生活をしなきゃいけないんです。そうすると、今言われている備え方だと、震度7が別物みたいに来たときというのは、残念ながら不便を軽減するのって、超限定的です。抜本的に考え直さないといかんんです。

3つ目に考えていただきたいのが、じゃ、別物の災害は皆さんにとって何ですか。地震はさっき言ったとおり、日本に住んでいる限り、どこでも起きます。気象災害は場所によって変わりますけれども、大雨は多くの日本、どこで降ってもおかしくないように、既になってきています。

山あいに住んでいる方だったら、大雨で裏の崖が崩れたなんていうのは、震度7と同じレベルで命の危険にさらされる地域です。

それから、群馬県内には大きな川が幾つも流れています。そういう川の河岸域に住んでいる方であれば、自宅の2階じゃやり過ごせないぐらいの深い浸水が想定されていれば、それも別物と言われるぐらい命に危険性のある備えになるでしょう。ぜひそういうのを、うちは何が危険なんだろうというのを、改めて考えていただければと思います。

いっぱいしゃべりたいことはあるんですけど、このクイズをやって終わりにしたいと思います。考えてみてください。

群馬県内で震度7を観測する大地震が発生しました。皆さんの自宅の近所で多くの建物が倒壊して、近所で犠牲になった方も出ています。ライフライン、電気、水道、ガスが止まっています。復旧の見通しは立っていないです。

こんな状況で、皆さんは地域の方々と協力して、避難所で避難生活を送ることになりました。被災して5日たちましたが、残念ながら行政からの支援物資等食

べ物等は、満足に届かない状況が続いています。この状況をテレビで見た、ちょっと離れたところに住んでいる、皆さんのお友達、親戚の方が、物資、水、食料を持って、皆さんがいる避難所に陣中見舞いに来てくれました。物だけ置いて帰ろうとしたその親戚、知人は、この様子じゃ、ここにいても、あんた大変だぞと。いてもしょうがないから、うちにおいでよと誘ってくれました。

近助だけでなく、被災地から離れる備えを！

近 助

災害時に役に立つのは、

遠くの親戚より

近くの他人

「隣近所で助け合う(共助)」

が重要！

と言われている

(特に被災経験者)

縁故避難

不便な被災地を離れる

近くの他人より

遠くの親戚・知人

いざというときに

身を寄せることができる

安全な場所(人)を2カ所確保！

(可能な世帯はぜひ！)

クイズです。誘ってくれたので、親戚宅に行きますか。それとも避難所にとどまりますか。手を挙げてください。親戚宅に多分行くという方。ありがとうございます。いや、避難所にとどまりますという方。いらっしゃいますね。ありがとうございます。

これは正解どちらでしょう。

そうなんです。私、もう正解を言っているんです、今日一番最初に。唯一絶対の正解はないから、どちらでもいいんです。個人によって状況は変わりますから、どちらにすべきだなんていう話ではないです。

でも、多くの被災地でどちらが当たり前になっているのでしょうか。被災地にとどまるです。被災地を離れることができない人は当然いますけど、外に出られるけど、その選択肢を行使しないで、被災地にそのままとどまる人のほうがとても多いです。

さらに言うならば、そういう生活をした人は、後世の人に語り部として、外に出ないで被災地に残ることを推奨するような伝承をされる方もいます。近所、という考え方を伝える人がいるんです、災害時には役に立つのは、遠くの親戚より近くの他人ですよと。



つまり被災した不便な避難所で隣近所みんなで協力しました。だから隣近所のお付き合いはとても大事なんですよ。被災された方の中には、これを当たり前にして、これを推奨するような言われ方をするんですけども、被災地にそのままいたら、やっぱり限界がありますよ。電気、水道、ガスが止まっているんですから。

それよりも、選択肢を増やしてみませんか。縁故避難です。近所とは逆の考え方です。不便な被災地を離れましょう。近くの他人よりも、遠くの親戚、知人。

いざというときに駆け込める場所をふだんから2か所ぐらい考えておきましょう。うちがやられたらこっちかこっちに受け入れてもらう、ここがやられたらこっちかこっちで受け入れてもらうみたいな関係を持てる人がいるのであれば、ぜひこんなのを考えてみたらどうですかと。

これは大事なポイントがあります。距離は遠くてもいいんですけど、精神距離が近くないと、被災して困ったときの受入れはできません。だから嫁姑問題が勃

発しているところの旦那の実家というのは、これに該当しないんです。どっかと笑うところですけど、そうでもなかったですね。ぜひ考えてください。で、最初に言ったんですけど、絶対これはやるべきだと言っているわけではないんです。できる人はぜひ考えておいてくださいということなんです。



最後になります。今日ここに来られている行政職員の人には、ぜひ考えておいていただきたい。なぜならば、災害が起きたら皆さんは、どんな行政職に就いている人も、災害対応にみんな駆り出されるんです。そのため、昼間は被災した住民からあれこれ言われて、心傷ついて、仕事が終わったあとも自宅が被災してしまっていたら、他の被災者と一緒に避難所で生活しなければならない。そこには被災して避難生活をして、つらい思いをしている家族が待っていて、今日はあれがなかった、これがなかった、隣の人は温かいのを全部ひとり占めして、掃除も手伝わないとか、そういうことも聞かなければならない。

こんな様子で、行政職員が被災地で仕事をまともにできますか。できないと思います。

であるならば、家族だけでも縁故避難ができるような環境を整えてみたらどうですか。何かあったらあなただけ被災地に残って、家族は別の場所に一時的に避

難する、そのための準備をしておくことも立派な災害への備えじゃないですか。

何か起こったときに、行政職員の皆さんは、ふだんと同じ生活ができると思わないでください。覚悟しておいてください。その覚悟に家族まで巻き込んじゃうと、さらに皆さんの負担が増えます。だから外に出せるんだったら出すという考え方を、ぜひ持っておいてみたらどうですかというのが、皆さんへの御提案です。

ということで、私の話は以上で終わりにしたいと思います。取り留めのない話で申し訳ございませんでした。御清聴ありがとうございました。（拍手）

さいごに・・・

みなさんは、どれくらい**当事者意識**を持つことができますか？

Yes

No

ちゃんとした職員研修を
やりましょう！
DIG、HUG、危機管理対応研修、
万全の事前の準備を！

必要なのは、
最低限の備え
と
覚悟

第3部 ディスカッション

『命を守る防災セミナー ～自然災害時あなたはどう動く～』

コーディネーター
パネリスト
パネリスト

金井 昌信氏
森田 正光氏
末永 正志氏



【司会】 それでは、お時間となりましたので、これよりディスカッション「自然災害時あなたはどう動く」を始めさせていただきます。

それでは、登壇者を御紹介いたします。

前段に御講演をいただきました森田様にはパネラー、(拍手) また金井様にはコーディネーターとして、引き続き御参加いただきます。(拍手) よろしくをお願いします。

そしてここからは、パネラーとして、東日本大震災の語り部として、震災で得た経験、教育を次世代に伝えるために御活躍をされております、末永正志様にも御登壇をいただいております。末永様、よろしくお願いいたします。(拍手)

さて、末永様の御紹介をさせていただきます。末永様は、2006年4月から3年間、釜石市防災課長として津波避難や土砂災害など各種訓練に携わり、2008年4月から、釜石市唐丹町の大規模林野火災を経験、災害対応と危機管理の重要性に目覚め、文部科学省所管の防災教育支援

事業を全国の自治体として初めて導入されました。教育委員会と連携し、小中学校における防災教育を推進され、釜石の奇跡を起こす基盤づくりを推進されました。

その一方で、鵜住居区防災センターでの悲劇を知り、成人教育の難しさを痛感され、東日本大震災の後から防災伝道師を名のり、全国の学校、公民館、自治体等で防災講演活動などを行っております。またボーイスカウト指導者として、50年以上にわたり社会教育活動に携わり、ボーイスカウト岩手連盟理事長や日本連盟評議員を歴任され、小中学生を対象に、震災後の遊び場の提供を目的とした「遊びの広場」や、心のケアを目的にした「自然とあそぼキャンプ」など、幅広く活動が続けられております。

それではここからは、金井様にマイクをお預けいたします。皆様、よろしくお願いいたします。(拍手)

【金井】 ここからはコーディネーターを担当させていただきます。森田さん、それから末永さん、どうぞよろしくお願いいたします。

最初に、今司会の方から御紹介いただいたとおり、ここから末永さんにも御登壇いただくということで、内閣府が作った、釜石のお話を伝える動画があるので、ぜひまずは皆さんにこちらを見ていただけたらということだそうです。

(動画上映)



【金井】 釜石が一体どんなことをやっていたかというのを紹介する動画を見ていただきました。

最初に末永さんからぜひ御発言いただければと思いますけれども、東北の三陸沿岸の釜石というところで、2011 年の津波が来る前から、津波が来そうだということはずっと言われていた地域だと思えます。そういうところで行政職員として働かれていて、学校の防災教育の授業もしましょうということで立ち上げていただいたわけですが、当時、震災の前、何を一番問題視していたというか、考えてお仕事をされていたか、率直なところでいいのでお話しいただければと思います。

【末永】 いっぱいあり過ぎて、ちょっと今日は時間が少ないので、皆さんに申し訳ありません。配布資料を出していますが、それを全て説明するわけにいきませんので、後で御覧ください。とにかくしたことのない体験の連続なんです。仕事ももちろん次から次と出てくるんです。

ただ私は、先ほどの森田さんの天候の話だとか、金井先生の話聞いて思い充てることがあります。ボーイスカウトの指導者をずっとやっていました。いいなと思うのは、野外活動者って天気を気にしながらやりますよね。だから皆さん、

今のうちに私は言いますけど、お勧めはファミリーキャンプなんです。キャンプの中に衣食住、全てあります。天気を含めた情報、防災情報を含めてあります。

で、健康、安全、どうしたらいいかということ、実はボーイスカウトを通じて、自分がいつの間にか、子供たちのために思っていたことが、自分のためになって、それが仕事になったというだけなんです。それが現実の場ですごく役に立ちましたということなんです。



【金井】 ありがとうございます。仕事を離れたプライベートの時間でずっと活動されていた経験から、子供たちの教育にもつながることをしていただいたということです。

実は先ほども私のお話の中でちょびっとお話ししたんですけど、群馬大学として釜石市のお手伝いを始めたのが 2004 年からで、学校防災教育を始めたのが 2006 年からになります。そこからの付き合いでずっとお邪魔していて、学校防災教育をいろいろやっていった中で、先ほどあったようなお話で授業をして下さっていた現場の先生方の努力で、子供たちがそのとき、平日の 2 時 46 分なので、学校にいる子もいれば、まちの中でばらばらに行動していた子たちも、みんなその場でちゃんと適切な行動をとって命を守ることができた。

それにつながったのが教育であり、そ

の教育のきっかけをつくっていただいたのが末永さんだという立場で来ていただいています。また、時の防災課長だったこともあって、震災時は退職されていましたが、そのときの様子等もこの後お話しいただけるとと思います。ぜひよろしくお願いします。

じゃ、どんどん幾つかテーマを決めていただいているので、それについてお話を伺えればなというふうに思っております。

1点目は、災害時にどう動くということを中心としながら、まずは、災害時にどのような行動をすれば安全を確保できるのかと、こんなざっくりした内容で、パネリストのお二人からお話を伺っていただければというふうに思います。

まずは森田さんのほうから、気象予報士としていろんな情報を発信している立場から、ぜひ気象災害に備えて、どう安全を確保するかということをお話しただければ。

【森田】 先ほど金井先生が、唯一絶対の正解はないというのをおっしゃっていて、それは本当にそのとおりだと思って。多分発信する側、我々気象予報士も全て発信する側は、正解はないよねと思いながら出しているんです。ところが多くの人たち、私もテレビとかそういう仕事を離れているときは多くの人たちになっているわけで、時々発信する側になるけれども、発信を受ける側になると、どの発信が正しいのかというのが分からなくなっちゃうんです。

気象に関しては一定程度の知識がありますから、こういうスマホでも何でも情報を手に入れることができます。1次情報も大体は分かります。

ところが全然違うような情報。フジテレビ問題というのがありますね。あれを見ると、どれが本当か全く分からない。

そもそも1次情報も分からない。そういう状況だからいろんな人がいろんなことを言って増幅している。あれはちょっと今のこの防災とかは関係ないかもしれないけれども、その情報の伝わり方ということは、実は同じようなことが起こるんではないかと。

要するに本当は何なのかって誰も分からないところで、誰も分からない同士でばんばん言い合っても、結局は何も分からないみたいな、そういう状況になる。実際そういうことが起こったときにしか分からない。



気象の場合もそういうところがあって、1次情報、2次情報、3次情報、どこまで。そもそもその次元はどこにあるのかという話ですよ。私が常に思っているのは、1次情報というのは、まず自分自身じゃないかと思うんです。自分自身がどうなっているのか。例えばよく大雨が降っているときに、どうしたらいいのと言うけど、その大雨がまず降ったときに、一番最初に分かる人は誰かといったら、気象庁でも何でもなくて、自分自身なんです。

自分の頭の上で大雨が降っているという、例えばそこにアメダスがあったら、大雨が1時間50ミリ降りましたというのが気象庁のほうに行って、それが気象庁から情報として発表されて、それがマスコミなりSNSなりで発信されて、例えば、ああ、前橋のどこどこで大雨が降っ

ているということが分かるわけです。しかし一番最初に分かるのは、まず自分自身なので、自分の命に関して、自分の周りの目に見えることが、まず最初の情報だと思うんです。



それをただ間違っただけで、同じようなものでも同じように見えません。

この水見たって、いっぱいあると思う人もいれば、減っているんじゃないかと思う人もあれば、CGだと思える人もあれば、いろんな見方があって、それを発信することによって、拡散していく過程で変化していくわけですね。そういうように、まず何を最初に信じるか。最初は多分自分自身だと思う。

2 番目に信じるのは何か。信じるというか、行動の指針になるのは何か。そうするとやっぱり、権威があるということとちょっと変なんですけれども、できるだけ今まで、うそをつかないということも変かな、何と言ったらいいんですか。できるだけ信頼の置ける機関なり。それは気象庁だったら国の機関ですから、それなりに信頼が置けるし。そういうところの情報を。

そして 3 番目に、4 番目にといい、その情報をまず、どういうことなんだというのを確かめるのがとても大事なことだなというふうに思っていて、気象情報の場合も、できるだけ自分自身はそういう発信をしようと思っています。

【金井】 ありがとうございます。言われてみれば私も、天気予報が外れるときにこのやろうと言っている。多分一緒ですよ。同じ感覚がある。多分根底にあるのは、自分にあまり専門性がなかったり、興味、関心がないことというのは、安易に答えが欲しいんですよ。こうしろと言ってほしいという。

多分それに答え過ぎちゃうと、この人には該当するけど、この人には合わない。それで自分に何が合っているかというのが、今、森田さんがおっしゃっていただいた、その自分が今どうなっているのかという、そこをしっかりと把握できるというのは、今お話を聞いていて大事だと思いました。

【森田】 はい。本当にそういうふうに思います。

【金井】 どうもありがとうございます。

次に、末永さん、どうですか、実際に 3.11 を経験した、本当にそのときの様子から考えて、何が安全行動につながるのかとか、知見があれば、お話しいただければと思いますけれども。

【末永】 一般論で言えば災害に限らないと思うんです。今、森田さんが言ったとおり、やはり最初は情報なんですよ。災害対策本部を開いて一番困るのが情報不足なんです。情報がないから対策打てないんです。我々が家庭にいても同じなんです。まずは正しい情報を素早く取得できるかどうか。それを分析して対応を考えるわけです。そして行動を取る。これは何をやっても、仕事でもそうですよね、変わららないです。やることはほとんど同じです。知識、技術、心構えですよ。災害対応も。そんなに項目は多くないです。

ただ普段からきちんと具体的に。先ほど金井先生が言ったような、みんながこう言っているこの情報って本当に正しい

のかな。あまり 3 日分も 1 週間分も備えなきゃいけないのかな。疑問を持たなきゃ駄目です。

それぞれのお宅が違いますよね。マンションに住んでいる方、一戸建てのうちの方、建築基準が違いますから、うちの揺れ方も、マンションは大丈夫だけれども一戸建ては液状化に弱いとか、それぞれなんです。十把一からげの対策は全く意味がないです。だからそういう意味では、やはり考えることは、それぞれの責任できちんと考える必要がある。それは情報ということだと思っんです。

【金井】 ありがとうございます。末永さん自身は、3 月 11 日って何していたんですたっけ。



【末永】 私は市役所を退職して、免許センターで講師をしていました。だから免許更新に来た方の講習をやっていたんです。ただならぬ地震があって。しかも場所も悪いんですよ。

釜石湾に注ぐ甲子川という川があるんです。甲子園の「甲子」と書いて「かつし」と読むんですけど。その河口、一番下の海に近い場所に警察署があったんですよ。その脇ですよ。私は 2 階で講義をしていましたけれども、63 人の方々と連れて高台の市民交流センター、前は白山小学校という学校があったところ、高台に。標高で言えば 25 メートルぐらいかな、そこに一気に逃げて。

我々の場合は、三陸は比較的逃げやすいんです。地震から津波が来るのは 25 分から 30 分と、大体統計的に分かっていますから、その間に逃げなきゃなんですよ。ですからそれを見ながら。その若い 63 人の方々は後ですごく助かりましたけれども、啞然として何もできなかったです。避難場所に逃げたというだけです、そのときは。

【金井】 ありがとうございます。御提供いただいた資料の中に写真があったので、ここに映しておきましたけれども、こういうことですかね。

【末永】 はい。じゃ、この話をしますかね。左のほうにすぐに警察署がありました。全く見えないでしょう。あの真ん中の辺りに見えるのは、県の公共埠頭があって、そこが倉庫なんですけれども、全くあの 3 階建てがもう水没しちゃったんです。あの写真で言うと下の山際になるんですけれども、下の写真はその水没した後です。赤線は全く。



警察官は何しているかというと、4 階に避難していて、何もしなかったんですよ。できないですよ。翌日も 1 m 以上水が引きませんでしたから、何もできないんです。

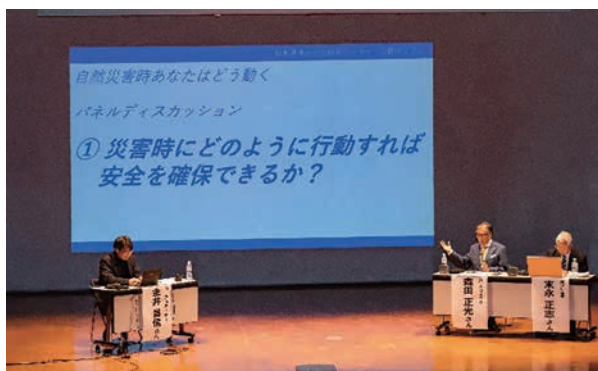
我々はこちらの市民交流センターに避難して。体育館です。小学校の体育館でしょう。実はいまだに日本では、避難場所が小学校の体育館ですよ。冷暖房な

ど何の設備も変化ないですよ、いまだに。主要先進国と言われますけれども、日本くらい変化のない避難場所ってないですから。一番困るのは女性のトイレですね。男はいいです、少なくて。そういうことがいっぱいあるんです。

たまたま我々が免許更新をしていた講師メンバーがすごくよかったです。主任さんは元消防長で救急隊の隊長だった方、もう一人は警察官、私は市役所の元防災課長、そこで町内会役員等に運営委員会を立ち上げ、避難所運営委員会をさっさと立ちあげました。町内会長さんは顔見知りでしたので。民生委員さんだとか、そういう人たちと一気に立ち上げました。

この中で一番のエピソードは食料確保。実はその63人の中から若い方十数人を選んで、『私が対策本部に連絡しておくので、1.5キロ先のスーパーに行って食料を持ち帰ってきてくれ』とお願いしましたが、災害対策本部と連絡がとれず、ウソになりました。三陸鉄道の高架橋(下は甲子川)の上を歩いて行ったんです。

そうしたらたまたま私と同じ考えを持った教育長さんが、被災区域ではないんですけれども、同じことを。『市の対策本部がいずれこちらに来るから、食料を分け与えてくれよ、市が責任を持つ』と、うまい具合にいきました。何とか3日過ごしたというのはありました。難しいです。私の場合はうそから出たまことでしたけど。本当にたまたまですがうまくいきました。



【金井】 貴重な御経験のお話、ありがとうございます。今のお聞きしていて、ほとんどの今の市町村は、開設する避難所に対して、行政職員、駆けつけ職員を配置していて、頑張っている市町村は、駆けつけ職員とそこに避難する自治会の役員さんが一緒になって避難所設営の訓練をやったりとか、訓練までできていなくても、何か計画みたいなのをつくってというのをやっているんです。これをやっても、残念ながら、近いところ言えば、あの能登の様子になるわけです。ほとんど何も機能しないんです。

片や今、末永さんにお話しいただいたのは、全然そんなことを考えていなくて、集まった烏合の衆だけで得意分野を掛け合わせて、何とかやりましょうと。どうですか、こんなのできますか。こういうことができる人というのは、ふだんの仕事の様子を見てれば分かるんじゃないかと思います。普段からどこの部署ともうまくやり取りできる人みたいな。

災害時だけうまく何かを回すことができる人って、絶対いないと思う。ふだんからいろんな人とのつながりを持てる人じゃないとできない。そういう素養がある人というのが、恐らく災害時にもちゃんとできる。

つまり災害用に人を育てようというよりも、恐らくそういう普段からの業務の中で。業務……。末永さんの的には業務じゃないですよ。遊びなんですよ。そういう視点というのが、やっぱりいざというときちゃんと行動を確保するときには大事なのかなと思います。

あと、群馬にいますから津波はないと思っているんですけど、ぜひ皆さんに覚えておいていただきたいのは、東北は地震が起る場所が、海溝の位置が海の中で決まっているので、陸までの距離がある程度分かるんです。だから津波がどこで起

こるかが分かるということは、大きさは分からなくても到達する時間は大体いつも一緒なんです。これが先ほどお話しいただいた 20 分から 30 分。

20 分から 30 分あって、何であんなに逃げられないで亡くなっちゃったんだろうというのは、やっぱり末永さんのお話にあったとおり、ここまで来るとは思わずに逃げなかった人がいっぱいいる。津波でさえそうなんです。気象災害なんてもっとですから。水害の避難の難しさというのは、もうぜひ群馬県の人には考えてほしいなと。

【末永】　そこで先ほどの情報の問題に戻るんですけども、実は気象庁の発表は、津波の高さが 3 メートルと言っていたんです。釜石湾の防波堤は水深 63 メートル、海上から 6 メートルの防潮堤があるんです。よその湾でもそうなんです。6 メートル以上ありますから。そうしたらどうします？ 逃げないじゃないですか。そこなんです。気象庁の間違いだっただけなんです。

それが時間が経つにつれて、3 メートルが 6 メートルですと言いだしたんです。そうしてしばらくしたら、10 メートルを超えますということです。実際 10 メートル以上ですよ。だから、その情報の真偽というのは本当に難しいですよ。我々は気象庁、あるいは森田さんも含め、気象予報士を信用していますけれども。

【森田】　ありがとうございます。

【末永】　そうならない場合もあるということですよね。

【森田】　津波に関しては地形によって全然変わるわけですよ。ただ情報というのは常に、大まかな平均値だったりとかしますよね。震度の場合は自動的に計測して出されるんですけども、それだっていろいろあって、建物によっても全然違ったりするので、やっぱり自分自身が

そこら辺のところを把握していないといけないと思うんです。金井先生の講演にもあったんですが、知るということはやっぱり一番大事なんじゃないでしょうか。



だからそれぞれが。だってそうですよね。1 億数千万人の人に同一の情報なんて与えられないですよ。それぞれに最適な情報というのは。だからそのグラデーションというか、幅の中で。その幅の中でも全部の幅を言ったら、すごいことになっちゃいますよね。だからその中の中央値と、せいぜいこういう一番悪いところを言うしかないんですよ。

例えば、ちょっと話が変わるかもしれませんが、明日の雪。日曜日、明日の朝、雪が降ると言っていて、ネットを開くと大雪とかというのが出ていますよね。今、私の個人の感覚で言うと、大雪なんて絶対降らないと思っているんです、23 区内は。でももし仮に雪の場合はどうなるかわからないので、実際に雪が降らないという話でも雪が降ったりしたときに、大きな被害というか、交通障害が起きたことがあるので、やっぱりそれは言えないですよ。

ここの高崎とか前橋の辺りだったら降らないと言えるので。まあ、雪は降るんですけども、そんなに積もることはないだろうと言えるんですが、都心だとそれはどうなのよと。最大、過去の記録で言うと、あまり降らないと言って 8 セン

チ積もって、交通障害が起きたこともあるじゃないですか。そういうことを考えると。

降雪と積雪は違います。降雪はそのまま降った雪、積雪はそれを測って一体どれくらい積もったか。だから気象庁の予報の場合は、降雪というふうにして出します。積雪というふうには基本的に出しません。もう既に積もった雪もありますから。だからもう降雪と言った場合は、その降雪3センチというのは、積もるということではないんです。

でも大体5センチぐらいの降雪があるとする、1、2センチは積もる可能性があるから、それを言うということはいいことなんです。

とにかく降雪3センチというふうには気象庁の予想が出たんです。23区ですよ。東京23区で。

そうするとその3センチという情報を2次的に取った人は、いろいろ考えた上での3センチというのを考えなしに、降らない可能性もあるけれども、とにかく3センチというのがどんどん独り歩きして行って、3センチ降雪。

さらに降雪と積雪の違いが分からない人は、3センチ積もるという情報に変わるわけです、そこで。3センチ積もるというのは、3センチ積もっちゃったら大変じゃないみたいな。それでどんどん拡散されて行って、正しいと思ったのは、最初の曖昧な、実はこれは確率これぐらいですというようなことでも、リアルになってくるんです、それが、移っていくときに。こういうことがもう気象の世界でも日常的に行われる。

だから実際に起きた現象と予測の現象とは全く違うけれども、あるいはその最初に出す側も、まあ、最悪これぐらいだよ、これ以上出たらマズイよね、という情報も、それが数字となっていくと独

り歩きしちゃうんです。だからこういうのをどうしたらいいのか。

これは全てがそうなんです。どうですか、金井先生。

【金井】 さっきも言ったんですけど、基本的に脳はサボるんですよ。すごく難しい情報、付随情報、エクスキューズがつくのは嫌いなんです。だから簡単にこうしてねという情報に食いつきたいという。それがさっきの正常性バイアスと一緒に、我々は自覚するしかないんですよ。安易に物を捉えようと、楽しようとしているんです。



芸能界のゴシップネタは別として、自分の命に関わるような情報ぐらいは、ちょっとちゃんと複数情報に当たりましょうというのは、やはり今森田さんが御指摘いただいたところからは、もうそれは絶対やらなきゃいけない話だなというふうには思いました。

【森田】 情報の裏側にもやはりバイアスがかかっているということ、ちょっと知っていただければと思いました。



【金井】 ありがとうございます。

さて、いいテーマで、このまま話をしたいんですけど、ちょっと次のテーマに行きながら、またお話しできればと思います。

2つ目、じゃ、心構えとしてどういう心持ちでいなきゃいけないのかということ、あとは今回主催者さんがそういう団体ですので、自治体の役割、組織づくりというのは、災害に備えてどうあるべきなのかと、この辺について、また次、お話を伺えればと思うんですけども、まずはこれについてやはり末永さんから、自治体の災害対策本部の話をお願いします。どこでもいいですよ、お願いします。

【末永】 では、本邦初公開という。何か釜石の奇跡とか悲劇とかあるんですけども、それ以上に、実は災害対策本部のほうはひどい状況でした。私は退職した後で、1か月半ぐらいかな、ボランティアで災害対策本部に行っていました。そこで見た情景というのは本当に、いや、ひどいものです。

いわゆる防災危機意識、認識の欠如です。欠如しているとどうなるか。自治体に準備がきていないということですから。対応なんかできるわけないんです。

それから一番困るのは、情報が入ってこない地域こそ被害が大きいということなんです。被害が大きいから伝えられない。

それから、公務員の一番、私もそうでしたけれども。情報を取得するという意識が低いんです。ところが自衛隊はどうですか。有事のときには積極的にやらなきゃいけないから、状況を把握するために、偵察者を出すとかいろんなことをやって、それから対応を考えるでしょう。それがいいんです。それが一番。

対応が後手後手に回る最後のところは、情報不足、情報を取らない、積極的に取っ

ていけないということなんです。それは後々ずっといく。そして情報処理、分析ができない。エキスパートがいない。

それから関係機関との連携調整が不調に終わる。もっと言うと、皆さん、市職員も市役所も被災するんです。先ほどの正常性バイアスですよ、そのことを考えないで、災害対応、あるいは地域防災計画をつくっても意味がないんです。まず自分の命を守る、家族の命を守るが第一なんです。



レスキュー隊も絶対そうですよ。状況判断で自分の命を守れなきゃ手を出さないんです。何でか。そこで自分が死んだら助けられる命が、その後助けられなくなるんです。だから自分の命を守るのは、実は自治体職員も同じなんです。自分を守る。家族も守る。家族は避難させることができる。自分が出勤できるかどうかから始まらなきゃならないんです。

私はたまたま市役所のすぐ近くに住んでいました。歩いて3分ですから。だから防災課長になったのかもしれませんが。近くにいないと駄目なんです。警報が出るたびに出勤ですから。ということは、自治体の職員の皆さん方は、父親が、あるいはお母さんでもいいんですが、出勤するという前提で事前に家族会議をして。出勤したら戻れませんから。1週間も10日も。その備えができていますかということなんです。そのための備え。こっち

の備えもそうなんです、その前に、ここに行くための自分の家は大丈夫ですか。



私の長男は浦安に住んでいました。浦安というのは埋立て地が多いですから、戸建ての3分の2が液状化の心配があります。退職して、退職金が入りました。おまへのところは駄目だ、危ない、町名が海楽という名前なんです。浦安高校のすぐ側なんです。埋立地ですよ。当時の建築基準法、昭和56年以前のは、そういう対策が全然ないんです。被災後の2か月後に行ったら元のアパートは、潰れていました。

マンションに移って元町というもともとの陸地のほうに避難して、全員セーフだったんです。だから地名も気をつけなきゃいけないんです。沼とか浦とか崎とか。群馬には海はないんですが、多分沼とかがあると思うんです。水とか。すると、そういうのがついたところは埋立地だから、液状化の心配をしなきゃいけないんです。そういうのが実は職員としての機能的なあるべき姿なんです。そこから始まって。

あっ、写真出ましたね。そして孫が小さかったんです。未就学児。だからマンションを選ぶ際には、2階から4階までの間にしなさいということです。何でって、ライフラインが止まるからです。電気、ガス、水道、全部止まるでしょうエレベーターが止まらなければ、小さい子

供をおぶって高い階の部屋へ行けないじゃないですか。食料も調達できないでしょう。水も上から順々に出なくなるんです。下のほうがいいですよ。だから、4階だと富士山も見えるからちょうどいいなと。そうしたら嫁がちゃんと見つけてくれて、それでセーフです。

だからそういう事前準備。自分の家が大丈夫か、家族が大丈夫だということを、普段からやっていないと実行できないですよ。先ほどの災害対策本部どころじゃないんです。実際に当時は3月議会中でしたから、職員はいっぱいいました。でも津波に襲われ孤立しましたから、行き来できないんです。津波で家が流されて道路が塞がれちゃって。いろいろなことがありますから。

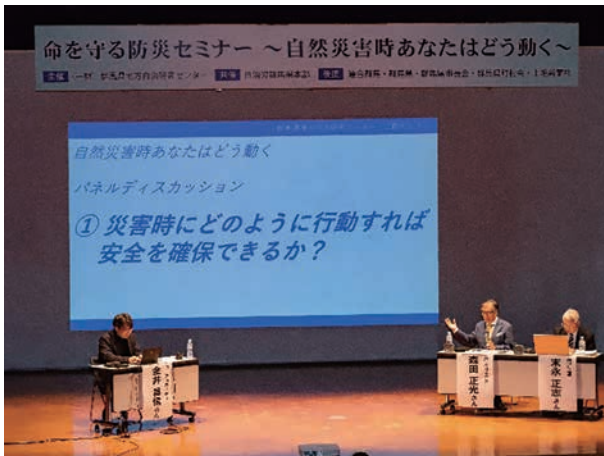
避難場所担当職員が現場へ出向くのは、早くて3日なんです。自分が担当する避難所に行くには3日～5日かかっているんです。私も避難所運営を3日やって、『家族を探しに行きますからさよなら』と帰りましたけど。そのイメージで実は3人でメンバーを組んで、運営委員会を立ち上げましたが、それはかわいそうでしたよ、本当に。夜は、マイナス3度か4度ですし、昼間でも2度か3度でしたから。ここよりちょっと寒いんです。冬場ですからもっと寒いんじゃないかな。何にもないような状況ですから。

まずは事前準備とよく言いますが、金井様も先ほど言いましたけど、不要なものもありますから、よくよく考えて、まずは自分の命、家族の命が先です。災害対策本部は後ですけど。

これは我が家です。津波で流れてどんと、鉄骨の家にぶっついてがしゃんと。1階がないんです。後ろもないんです、流されて。

災害対策本部の話ですけども、本当に、いやーという部分があります。何で

かという、私は在職中に通常訓練を計画したんです。災害対策本部運営などの。警察とか消防は来てくれたんでよかったんですが、何とそこに臨時議会があてられて、市長以下誰も来なかったんです、幹部職員が。あれやっていれば。それが私の悔いが残るところです。やっていればもっと運営できたし、準備もできたんじゃないかなというのが1つ。



それから、私のときは防災課なんです。部長はいますけれども、3つ4つ、課を担当しますから、あまり関心を持たないですね。議会对応ばかりですから。市長が私のところに来て、『防災課を部に昇格させ危機管理課を置きたい。ついてはそれを調べて手配してくれ』ということで出しました。4人しかいない職員のところを10人ぐらいの構成でもってやればいいんじゃないかなと。今はそうなりますけど。

それも誰がつぶしたか分かりませんができなかったんです。平成20年の話です。3.11は平成23年ですから。そういうものですね。あれが両方かなってれば、もう少し被害は少なく対応も早かったんじゃないかなと思います。勝手な思いですけど。できなかったからそんなところなんです。そして、いわゆるその危機管理にたけた人がいなかったということです、要は。だからもう惨たんたる思いでした。

災害対策本部にボランティアに行っていましたけれども、何も決まらないです。決められない。情報も入ってこない、取りにもいかない。本当に何なのかと。1週間もそうです。

災害対策本部自体がここに移ってきたんです。市役所にいられなくて。市役所はもう孤立しちゃったんです。周りもすっかり。市役所だけ高台のところを含めた高台。その前は全部海にのまれましたから。だから一番私が思うのはそこです。市民に対して申し訳ない。やればできることができなかったという思いが強くなりました。



【金井】 ありがとうございます。当日を迎える前に課長さんをやられていたときの訓練ができなかったお話とか、組織とかというのは、多分震災後ですね。多くの自治体がそれは変えたんですよね。

災害のそのの大きいところは複数所管するような部署じゃなくて、ちゃんと防災専門の課に上げたりとか、あとは首長が参加するような危機管理練習とかをやられていると思うんですけど、やっぱりあれって、一部の役つきの職員、あとは防災担当だけなので、恐らく今日参加されている自治体の職員の皆さんは、防災担当部署の方以外の方もいると思うと、その前の末永さんのおっしゃっていただいた、まずはその仕事に行ける環境をつくっておけというのは、多くの自治体職

員の方には響いた指摘になるのかなというふうに思いました。ありがとうございます。

次、森田さんから、自治体の役割という、普段の心構えの部分で、前半の講演の中でもお話しいただいた、異常災害というか、今までとちょっと違うレベルの気象災害が増えている中で、経験しない人たちばかりです。ぬるま湯につかってきました。これからそういうのが来るということに対して、どういう心構え、どういう備え方って、何かあったら教えていただけたらと思います。

【森田】 まず1つ、今お聞きしていただけたのは、地震と気象災害を全部一緒に自然災害というふうにくくっているけれども、金井先生のおっしゃった、震度7は別物という部分、これは本当に大事な指摘だと思っています。

末永さんがずっとおっしゃっていた3.11は、別物の災害だったという感覚があります。それはどこかで必ず起きるけれども、30年に一度なのか、50年に一度なのか、ここにいらっしやっている方が経験するかどうか、ひょっとしたら分からない。だから、震度7はとにかく別物とまず考えを置いて、それはそれでやりましょうという感じ。

僕自身の役割は、日常気象災害をどうするのよと。その積み重ねが恐らく震度7のときにも、多分役立つだろうと思うんです。先ほど言ったのは、まず第1情報というか、確実な情報を手に入れようというのが1番目です。じゃ、2番目に、今、日本の気象状況、その気象の上ではどういふ変化が起きているかという、例えば大雨に関しては増えている。先ほどお伝えしたとおりで、局地的な豪雨も増えている。

ただ、ちょっと興味深いことに、群馬県のこの前橋辺りの雷日数。今日はタク

シーで送っていただいたんですが、そのタクシーのドライバーの方がずっと前橋で、70歳ぐらいだったと思うんですけども、その方に、昔と今でどうですかと言ったら、僕はてっきり、豪雨が全体的に増えているから、雷日数も増えていると思ったんです。そうしたら、いや、小さいときよりも今のほうが減っていると言います、雷が。ええっと思ってすごく驚いて。

僕我感觉の中では、北関東も、全国的には増えているんです、大雨が。だから北関東も増えていると思ったら減っていると言うので、さっきチャットからばーっといろいろ、来る間に調べていたら、本当に実は、減っているというのは確実には言えないけれども、変化がない、有意性がないということがどうやら本当らしくて。

そうすると何か、この辺りの雷に関しては、それが何でもよく分かっていないんですけれども、とにかくこの10年、20年ぐらいの感覚では、増えているとは少なくとも言えないという感覚なんです。これは正しいかどうか、まだ正確に検証していないのであれなんですが、少なくとも自分が思っていたのとは違う状況になっている。

ただ、確実に何がこの辺りで災害リスクが高まっているかという、熱中症は確実にそうで、もう猛暑日と言えば、講演の中でもお伝えしたんですが、36日？

それまで10日もなかったようなものが。だから、そういう今までと違う気象災害が起きやすいということが、1つ言えると思うんです。

大雨とかについて言うと、雷日数はそうだけれども、例えば鬼怒川豪雨があったりとか、広域なものに関しては増えている。そういうところでやっぱり気象情報は、最初の講演でもお伝えしたように、

行動を変えるためにあるものだから、そういうような情報を基にして、自分の行動を変えるようにしていただきたいと思いました。

ただその雷が減ったのが、ちょっと僕にはよく分からないんですけれども。答えになっています？



【金井】 なっています。ありがとうございます。

私、前橋じゃなくて、桐生という、もうちょっと東にずっと住んでいるんですけど、確かに小さい頃のほうが、雷 3 日と言うぐらい、よく雷が鳴っていたような気はします。検証してみたら面白い結果が出るのかなというふうに思いました。

【森田】 ええ、だから、それはもし減っていると、やっぱり気候変動というのは単純に起こるんじゃないくて、どここの場所ではこうなるという総合的なものなので、ちょっと研究というか、そういうことも重要ななと思いました。

【金井】 ありがとうございます。極端になるというのはよく言われる言葉だし、もう把握させてもらっているんですけど、今、気象災害の中で熱中症対策の暑さが大変ですよというお話をされたんですが、暑さ対策って、経験して行動するじゃないですか。だから習慣に入れやすいんですよ。

雨って、雨は降るけど、その度を超える大雨というのは、そうなるかどうか分

からない。本当に確率情報じゃないですか。もうちょっと正確に言うと、熱中症情報は、これは確率じゃなくて、もう事実情報ですよ。そうすると、確率を伴って、大雨が降るかもしれないことに対して今日備えるべき。

例えばさっきの大雪もそうですが、降るかもしれないものに対して行動を変えるというのは、とても情報の伝え方が難しいと思うんですけど、森田さん自身がいろんなところでお話するときには工夫しているポイントがあったら。

【森田】 すごく面白い指摘で、どんどん話に変化しちゃっているんですけども、実際今おっしゃった確率という考え方自体が、ほとんど、我々もそうなんですけど、あまり理解できていないんですよ。だから確率 2 割のときに自分がどうするのよ、3 割のときにどうするのよという。

例えば去年でしたか、台風 12 号が来たときに、確率がそんな高くないのに、2 日間新幹線を止めたということがあったんです。直撃の可能性はあったけれども。そのときに、批判はあったけれども、もし来たときのために止めたわけです。ああいうときに、止められたことによってすごい被害を被った人もきつというわけですよ。だけれども一応社会的にはそういう、確率がこれ以上のときにはこういう対応をして、それで外れたとしても許されるという風土になってきましたね。

これはやっぱり議論が要るところではあるけれども、確率何割以上ならこうする、このほうがお金も人命も含めて、こちらが得だという、そういう研究が、今まだ完成されていないんですよ。だからその部分をこれから積み上げていくと、確率 60% でここでこういうことが起きるから、だったらこちらの行動をしたほうが得だよという。

人命は何よりも、1%であってもそれをしてはいけないわけだから、人命に関することは別として、全体的な社会的な合意として、確率情報とか確率に関する災害をもっと取り入れると、とてもいい情報になると思っています。

【金井】 ありがとうございます。来週からの「Nスタ」、楽しみにしています。

【森田】 いえいえ。そんなことまで言えませんか。

【金井】 非常に有意義な議論、ありがとうございました。

もっとたくさん聞きたいんですけども、せっかくこんなに来ていただいているので、フロアの方から質問を受けてみたいと思います。

ぜひもし何か御質問、御意見がある方がいらっしゃれば。

手の挙がっている、手前の帽子をかぶっている方から。



【会場】 森田さん、コロナの前のラジオでよく言っていたのは、エルニーニョとラニーニャなんですけど、温度が上がるのはどっちのほうなんですかね。

【森田】 エルニーニョとかラニーニャというのは、東部太平洋の海水温が高いかどうかです。東部太平洋の海水温が高いのがエルニーニョ、低いのをラニーニャと言います。だからそこで言うなら、どっちかということ、じゃ、日本付近はどうなのかということ、物すごく簡単に言うと、

エルニーニョのときには日本の夏は気温が低いというか、不順な夏になりやすい。逆にラニーニャになると、夏が暑くなる。こういう傾向がありますね。よろしいでしょうか。

【会場】 それで、2024年度は最高の温度といったんだけど、温度の変化はだんだん上がっていくんですか。

【森田】 今実はそれとは別に、日本近海の海水温がとても高いんですよ。今回大雪が降ったのも、日本海の海水温が平年より2度くらい高いんです。海水温が高いといったって12度ぐらいなんですけれども、海水温が高いということは、そこから蒸発する量が増えるので、その蒸発した水蒸気が、今度冷やされて雪になるわけです。

だから日本海側では先週大雪が降ったし、それから、実は来週、すごく日本海の水温が高いので、これまでにないような大雪が降るという予報が今出ているんです。

ですから、Aの海水温、あるいはAの気温が高いことが、必ずしもこちらにも高いんではなくて、関連して、その部分部分で言うと、いろんな現象を起こしているという理解でいいでしょうかね。

【金井】 ありがとうございます。

ほかの方の御質問。奥の方、お願いいたします。

【会場】 貴重なお話ありがとうございました。1つ質問させていただきたいんですが、国、内閣府は、自助、共助、公助で防災力強化向上を目指してきました。個人の意識は上がらず、共助であります地域も高齢化しております。先ほど末永さんから話がありましたように、公助の行政も異動2〜3年で、スペシャリストが育っていないような気がいたします。

そうすると、市町村長や議会のほうが力を持っちゃって、防災に関して予算が

取れないという現状も、もしかしたらあるんじゃないかなと思っていまして、自助、共助、公助の今後の在り方はどうあるべきかをちょっとお聞きできればなと思って質問です。

【金井】 ありがとうございます。どうですか、末永さん、自助、共助、公助の今後の在り方。

【末永】 質問ありがとうございます。一番難しい質問ですよ。ただ、いい傾向かなというのは、石破総理大臣が防災省を設立するというような話で動き始めていますので、まずそれに期待したいというところが大きいです。

普段ないような大きな 3.11、東日本大震災は、そういう地震、津波だったんですけれども、そのために果たして高額な予算と人員を配置して、日常時にそれで維持できるかどうかという問題が片方で出てきますよね。災害時にはいいかもしれませんが、じゃ、普段どうするの。20年、30年後かもしれないわけですよ。そこのバランスをどうするかということがあると思います。

ですからいろんな意味で問題はありますが、一番は首長の防災危機管理意識の問題です。私の場合はそれがなかったんです。ですから恐らく国がそういう動きでいけば、県も市町村も、それに沿って予算を獲得しやすくなる傾向はありそうな気がします。

ただしそれであっても、あくまでも自治体の長である首長がそういう意識をきちんと理解して研修を受けて、危機管理意識を持って、部下にも職員にもそういう研修をどんどんさせるような体制がないと駄目ですよ。私の場合は全然受けていません。

もっとひどいのは、私の前の防災課長は1年、その前も1年、その前も1年だったんです。要するに、国全体が、地域全

体が防災意識がなかったんです。ないところに来まして。



ないという言い方も変なんです。260年の間に6回ばかり大きな地震があって、平均すると37.1年というデータが出ているんです。平成18年、19年、20年と私はそれをもって、地域に説明して歩いているんです。でも肝腎の親分のほうがそれがなかったんです。あるいは市役所の中。だからそのバランスというのも難しいんじゃないかな。とても貴重ですけども、大変難しい質問だと思います。

【金井】 ありがとうございます。末永さん、今の話で、共助はどうですか。その地域を回っていたとかと言っていたけど。

【末永】 実はそこが一番大事です。少子高齢化だといって手をこまねくのではなくて、少子高齢化だからこそ、コミュニケーションは必須ですよ。私は中学校、高校の防災講演会に行くと、皆さん、挨拶していますかと聞くんです。するとみんな、大体していますと言うんです。

じゃ、挨拶しなかったらどうなりますか。誰も気にしなくなりますよね。普段挨拶していない人を捜しません。だから捜さないんだから、行方不明者にもなれないんです。そういう地域をつくっていくんですかということです。普段から挨拶を交わして、お互い、今日天気がいい

ですねとか、今度町内で何かお祭りがあるそうですねとかという、日頃の付き合いの中から、その共助の根が張っていくと思うんです。

自分の命、家族を守ると言いますが、けれども、周りの人たちの手助けがなければ助けられないというのは、阪神・淡路大震災で証明されているんです。75%が近隣住民ですよ、助けているのは。プロじゃないんですよ。

人口が少なくなればなるほど。山間部もそういうところほど、実はコミュニケーションが濃いんです。人が少ないから。

ところが街中かだとマンションだとアパート、よそから来る人がいると、町内会にも入りません。自治会なんか入りませんよね。すると、そこの地域でのイベントにも参加しません。2～3年経てば帰ると思っていますから。そこのところをどう工夫するか。行政がどう介入するか。一緒になってやっていけるかどうか。その薄いまちなんです、釜石って。

今の日本製鉄、新日本製鉄、八幡と富士が合併したときに、製鉄所があったまちですから。9万2,000を超える人口が、今3万人を切りましたから。そこに来るわけでしょう。だからこれは防災というだけではないんです。楽しく有意義で人生が終わるようなまちづくりをみんなでやるという。ですから今、市役所の組織に知らない課ができています。まちづくり課なんです。総合的なんですよね。そういう動きがぜひ必要だと思います。



【金井】 ありがとうございます。

もしあればもう一件ぐらいは大丈夫です。お願いします。

【会場】 積乱雲は何であんなもっこりした形になっているんですか。

【森田】 何でもっこりした形？ 面白いな。どうやって答えようか。パンって焼くでしょう。お餅でもいいや。お餅、四角いのあるでしょう。下からわーっと熱を加えると、上のほうがぽわっと膨らんで、ぽこっと盛り上がるじゃない。パンもそう。パンもずっと焼くと、ふわっと膨らむわけ。

水蒸気という目に見えないものが、ずーっと下から上がっていくと、下からどんどん温められて、上のほうに行こうとして、それで盛り上がってふっくらとするわけ。だからふっくらして、ふっくらして、ふっくらしたやつは、めちゃくちゃ下のほうから水蒸気がやってきているわけ。雨のもとがね。だからああいうぽっかりして、もくもくしたやつほど、強い雨を降らせる。すっきり。ありがとうございます。

【金井】 ありがとうございます。

朗かな雰囲気になったところで、最後、壇上にいる皆さんから一言ずついただいて、終わりにしたいと思います。

今回、「自然災害時あなたはどう動く」というテーマで、基調講演、それからパネルディスカッションをさせていただきました。

最後、壇上に上がっていただいたお二人から、今から私たち、何かできることあるんですかねと、この辺について、正解はないと自分で言っておきながら、何か頂戴という矛盾を感じないでもないんですけど、お二人から一言ずつ、最後皆さんに、うんちくのあるお話をいただけたらと思います。

まず末永さんからお願いします。

【末永】 ぜひファミリーキャンプをやってほしいです。先ほども言いましたが、情報、安全、健康管理、衣食住、全部入ります。何でもかという、楽しいファミリーキャンプが、サバイバルスキルを持続させることができるということです。楽しくないと続かないです。幾ら仕事だといっても防災だといっても続かない。

私は片方で青少年教育ということでボーイスカウトでキャンプをずっとやってきました。海外まで行きますから。そのときの基本は、やっぱりテント設営なんです。それから情報なんです。ろくに英語もしゃべれないのに行くわけですから。でも、人間の表情ってそれなりに何となく分かるんです。

まずは大事ななのは自分の命なんですけれども、ぜひそのためにこそ野外活動。特に家族キャンプをお勧めです。全ての要素が入っています。楽しくなければ続けられません。継続できません。忘れます。やりません。知識、技術、心構えです。楽しくやりましょう。

【金井】 ありがとうございます。

では、続きまして、森田さん、お願いします。

【森田】 今日はすごい勉強になって。末永さんのおっしゃった、今のファミリーキャンプもそうなんですけれども、地域のお祭りみたいな、日常的にそうやっていないと、結局助け合いつてできないですよ。顔見知りになったら、そうだよ、一緒にやろうとかなりますものね。だからそういうのってやっぱり、普通、いつもどおりのところから生まれるんだなという気がしました。

あと、ローリングストックというのもすごく分かって、僕らは本当に防災のそういうイベントなんかを見たりすると、これをこうというよりも、やっぱり普通

にやっている生活の延長線上として災害に対する、なんだか震度7は別物というのはすごく響いていて、あれはあれでちょっと別物だと思うんですけど、それ以外の大体の災害というか、気象災害も含めて、大体のことはそういう心の、何というんですか、皆さんのつながり、そういうもので何か改善できるような気がしました。

あと、僕個人でいろんなことを思うと、いつも、今日起きたことで何か考えよう、何か考えようとしているんです。実際に今日起きたことは何かというと、新幹線で東京駅から乗りました。そうしたら12号車と11号車と10号車がありました。ずっとつながっていて。一応グリーンを用意していただいたので、11号車でした。

11号車のところに東京駅から乗ろうとしたら、物すごい長蛇の列が続いているんです、乗るために。ところが12号車のほうは車両が半分。11号車は長い。10号車も長い。12号車は車両が半分ということもあって、お客様が少ないせいか、12号車の入り口は誰もいないんです。

それで私は11号車のチケットを持っていたんですが、その二、三メートルしか幅がないですから、12号車に入っていった。その後、どんどん列が解除していった。皆さんが入ったんですが、このときに思ったのは、同じ行動をしていると、同じ行動が悪いと言っているわけじゃないですよ。同じ行動も大事なんだけど、状況を見ずに同じ行動をしていると、結局ロスが起こるんじゃない？と思ったんです。

例えば災害時のトイレ。トイレの数が少ないということはあるけど、同じ一番近いところに集まっちゃったりとか、そうなるところまで考えて。

この前ドラマを見ていたら、「人の行く裏に道あり花の山」なんて、昔の相場か

何かの言葉を言っていましたけれども、確かにそういうところもあって、同じ行動をする場合が一番簡単かもしれないけれども、ちょっと違う行動、そんなようなこともあるんじゃないかというふうに思ったりして、一つ参考に。

取りあえず、今日、その列車に乗ってくるときに、ああ、みんな同じところ、11 号だから同じ入り口から乗ろうと思うけれども、横から見たら。それは横入りでも何でもありませんね、別に。そうしたらがらがらだから、そうしたほうが結果的には緩くなるとか、そんなようなことも思ったんですけれども。

あと、トイレの問題。あれは重要ですよ。災害時って 3 日間、ローリングストックでやればいいと思うんですけれども、ああいう問題も解決しないといけないことがいっぱいありますよね。終わりのところにこんなことを言うのも何ですけども。

すみません、いつもこんな散漫な対応で。(拍手)

あともう一点だけ。

【金井】 どうぞ。



【森田】 もう一つだけ言うと、玄倉川の事故というのがありました。30 年ぐらい前ですかね。熱帯低気圧が来て、大雨が降ったんです。大雨が降ったというのは、川の上流で大雨が降ったんです。で、川の真ん中でキャンプをしていたんです。

中州でみんなが。それで上流で大雨が降ったから、ダムを放流しないといけなから、増水することが分かっていたから、その中州でキャンプしている人たちに。本当に大雨が、ここの真上では降っていないんですよ、真上では降っていないけれども、上流のほうで大雨が降って、ダムを放流するから危険だから逃げてくれ、逃げてくれ、逃げてくれと言っている、その人たちは逃げなかったんです。降ってへんやんという感じです。

ところがその後、もうダムが危なくなっちゃったから、放水したり、大雨が降って、それでテレビカメラの前で流されてしまったという悲惨な事故がありました。

あれはとても、教訓と言うと怒られるかもしれませんがけれども、そういうことが我々の中にも常にある、やっぱり自分だけ大丈夫という、さっきの正常性バイアスじゃないけれども、常に情報に耳を傾けて。それからちゃんと、変な言い方ですが、言うことを聞く。危ないときには、人というか、そういう防災関係者の言うことを聞くこともとても大事なということも感じて、ちょっとそれが一番今日いろいろ思ったことなんです。どうもありがとうございました。

【金井】 ありがとうございました。お二人から非常に貴重な意見をいただきました。

最後、私からも 1 点だけお話しできればと思います。心構えという言い方はいいと思うんですけれども、やっぱり私は防災意識を高めましょう、もう限界だと思います。そんな高めたところで何するか分からないようなことを訴えるよりも、何か 1 つでいい、ふだんの生活を変えてくださいと。先ほどのローリングストックもそうです。

いざというときやるというのは、やっていないことをやろうとするので、うま

くできなかったりとか、まだ大丈夫でしょうとか、いろいろエクスキューズ、言い訳をつければやらなくて済んじゃって、そのまま素通りしていることがたくさんあるんです。なので、もう生活の習慣に変えていくというほうが、やっぱり災害への備えとしては長続きするんじゃないかなと。

買物の習慣を変える。どうですか、車社会の群馬県民。ガソリンを入れるペースは？ランプがついてから入れる。これをやっていたら、ランプがついているときに災害起きたら、もう車が使えなくなって、すぐに痛い目を見ますからね。半分で入れるなんていう習慣ができれば、ほかの人よりも圧倒的に災害時に役に立つ。

それから最後、森田さんが触れていただきましたけど、避難生活でトイレがすごく困るって、これは毎回言われるんです。まあ言われるんです。で、どうすればいいですか。簡易トイレを持ち歩きましょう。以上、終わりなんです。

地震っていつ起きるんでしたっけ。いつ起こるか分からないんですよ。ということは、簡易トイレはいつも持ち歩く。当然ですよ。今日、皆さん、かばんにちゃん簡易トイレ入っていますよね。えっ、この失笑、もしかして入っていない？えっ、持っていないの。じゃ、どうするの、今日、今地震が起きたら。中年男性が多いからその辺でやる気ですね、みんな。となる訳です。あんなの1個入れておけばいいんですよ、ずっと入れておけるのに。ちなみに私は入っていますからね、当然2個。あげないですよ。

というふうに、習慣を変えてみてください。おじいちゃん、おばあちゃんはランドセルを買ってあげることになりますよね。ランドセルに簡易トイレ。習慣化してください。群馬県の新しい習慣にすれば、これでちょっとよくなるかなと思

いました。

ということで、ぜひ今回のこの議論が、皆さんの普段の生活のお役に、もしくは普段の業務のお役に立てればなと思っております。

登壇していただいた2人の活発な御議論に感謝申し上げて、取りまとめの任を解かせていただきます。どうもありがとうございました。

【司会】 森田様、金井様、末永様、大変貴重なお話、ありがとうございました。少し、私個人としての感想をお話しさせていただきますと、私は38歳なんですけれども、やはりこの間生きてきた中でも、震災と言っても、阪神・淡路、中越、東日本、能登と、大きな震災、様々、当事者、被災者としてではなくて、経験、見てきていますし、様々な豪雨災害、台風災害等もありました。



特に働き始めてから、私も地方公務員でございますので、東日本震災であれば、福島、岩手、そちらのほうにもボランティア等、できるだけ関わっていきたいと思って関わってきたんですが、金井さんがおっしゃっていましたけれども、頭はサボリたがると言っていたんですが、いかに傍観者であったかと。

目の当たりにしたものを、自分事にどれだけ変換できていなかったかというのを、やっぱり今日貴重なお話を聞く中で痛感しました。やっぱり働く中でも、世

に生きる一人の国民としても、しっかりと、想定力というんですか、想像力、そういうものを持って、自分事としてできることからやっていかなければならないなど、私個人としては痛感した次第で

ございます。本当にありがとうございます。

そうすればいま一度、会場の皆さんからの盛大な拍手でお三名をお送りしたいと思います。ありがとうございました。

防災セミナー(ディスカッション) 2025in 前橋

私の東日本大震災の教訓

防災伝道師 末 永 正 志

1、我々は備え以上のことはできません。

- ⇒ 災害は、全ての人に襲い掛かります。自治体職員も市役所も被災します。
- ⇒ 市役所や公共施設、ライフライン事業施設等の立地条件の確認が必要です。
- ⇒ 自分の命、家族の命を守る事前準備(家族会議)から始めましょう。

2、危機管理と対応計画は、最悪のシナリオに基づいて作る必要があります。

- ⇒ 防災・危機管理部局は、首長がリーダーシップを発揮できるよう参謀役に徹します。担当部局だけの防災計画は無意味です。全部局の理解と心構え、行動力が不可欠です。
- ⇒ 被災市民の約 4 割は、理解せず何もしない方々です。誰もが幸せな人生を送るには、防災・危機管理研修・訓練を、関係組織、自治体職員、全市民を対象に実施することです。

3、事前防災(取組)は確実に被害を軽減できますが、ゼロにはできません。

- ⇒ 過去の教訓に学び、常に現状を点検し、事前準備に取り掛かりましょう。
- ⇒ 自宅点検(転倒防止、備蓄、避難準備等)を行い、避難・出勤できる体制を取りましょう。

4、不確実な状況下での判断と対応が必要です。

- ⇒ 防災・危機管理術を学び、身に着けましょう。知識、技術、心構えが大切です。
- ⇒ 災害対応は、情報待ちではなく、積極的な情報取得の姿勢が重要です。情報の無い地域ほど、被災状況が過酷です。
- ⇒ 現場対応は、日常から非日常へと臨機応変に対処する心構えと行動力が必須です!!

5、被災者の思いを忘れず、教訓から学び、行動しましょう。

- ⇒ 歴史に学び我が事として準備し、命、絆、組織、コミュニケーションを守る行動を!!
- ⇒ スカウト運動では、「いつも他の人々を助けます」を実践するため、「体をつよくし 心をすこやかに 徳を養います」を推奨し、「備えよ 常に」をモットーとしています。

太田市社協の意識改革に取り組んだ五年

群馬県地方自治研究センター 理事長 黒澤孝行



はじめに

私は、2020年6月 太田市社会福祉協議会の会長に就任し、本年6月の評議員会において退任いたしました。この5年間で特徴的ないくつかを報告し、地方自治の発展のために参照していただければ幸いです。

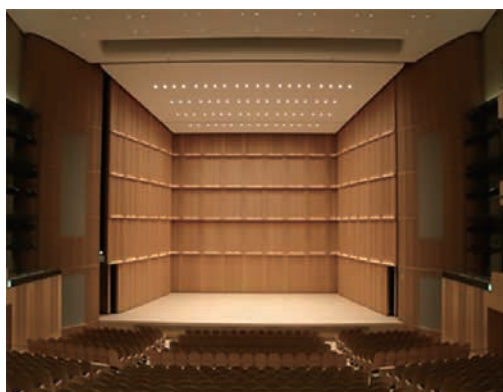
平成の合併により、旧新田町、旧尾島町、旧藪塚本町との合併で、人口約22万人の太田市が誕生しました。本年で20年が経過しており旧自治体の壁は少しずつではありますが解消されつつあるものの、一部にまだまだ厳しい現実があります。



合併当初の清水市長は、職員を200人削減することができ、相当の財政削減が見込まれ、その財源を他の開発部門に回すことができると合併のメリットを強調していました。各市・町本体の職員の合併は、順調に進んでいきましたが、外郭団体の職員（社会福祉協議会、土地開発公社、スポーツ振興財団、等々）の統合のために「太田市行政管理公社」が結成されました。

「太田市行政管理公社」は、2001年4月に太田市の外郭団体職員の一元管理を行うための任意団体として発足しました。

2009年4月に一般財団法人を設立し、市民福祉の向上や快適な居住環境の整備等に貢献することを目的に、公共施設の管理および運営を受託するなどの諸事業を実施しています。



太田市民会館



精米事業(学校給食)



エアリスの小さな森公園



太田市美術館・図書館

©Daichi Ano

市民目線で言えば、太田市の関連職員の総数に変化はなく、一般行政職員と行政管理公社職員に分化されただけでした。太田市社会福祉協議会は、この「太田市行政管理公社」(約 300 人弱)の 3 分の 1、90 人を擁する大きな組織であり、女性が 7 割を占めています。行政管理公社職員の平均賃金は、一般行政職員と比較すると約 2 号給程低いと言われており、健康保険は市町村共済ではなく、中小企業の協会けんぽ、いわゆる社会保険です。このため職員のモチベーションを上げることが市民サービス向上のためには必須のことと考えました。「太田市行政管理公社職員労働組合」は、別個に結成され、自治労群馬県本部に直接加盟しており、本体の太田市職労の力を借りながら連携をして取り組んでいる現状にあります。

このような基本的な認識の中で社会福祉協議会の会長に就任した私は、第一に行政管理公社職員全体のモチベーションを上げることが市民サービスの向上につながるものと考えました。一般市民から見れば、一般職員も行政管理公社職員も同じ「太田市役所職員」です。特に、社会福祉協議会の職員は、福祉最前線、セーフティネットを支えている職場が多いため、その意識改革をはかることが急務であると考えました。

私が第一に取り組んだのは、行政管理公社の実質的な責任者である副市長との意見交換の場で議論することでした。議論した結果として、太田市の外郭団体、行政管理公社、のトップ 3 役を一堂に会して、市民サービス向上のためには職員のモチベーションを上げることが必須であるとの共通認識を持つことになりました。

■組織的な運営に

次に、私が取り組んだのは、社会福祉協議会の運営と職員の意識改革でした。



前述したように、社会福祉協議会は太田市行政管理公社の傘下であり、人件費は全て公社が責任を持つため、その心配をしなくても良いということもあり（県内の多くの社会福祉協議会が施設運営等で赤字経営となっており人件費の捻出に苦勞している）、人件費に対する意識が欠如していました。そのことも一因かもしれませんが、組織運営がバラバラでした。各課、各係は、それぞれ一生懸命に仕事をしているのですが、「社会福祉協議会」全体の仕事になっていませんでした。社協としての意思決定が、いつ、どこで、誰が行っているのか不明であり、個々の職員にとっては、自分の仕事（担当）以外は、社協が今何をしているのか関知しないでも良いという状況でした。ちょうど、コロナ禍であり、ほとんどが、これまでの日常業務をこなしていれば良いという状況になっていました。唯一、社協全体の会議として、月 1 回、月末の月曜日に係長以上の管理職で「所属長会議」が開催されていましたが、その内容は、日程報告や調整で終わり、わずか 30 分程度のものでした。業務についての議論、討論ではなく、社協としての意思決定を行う場ではありませんでした。“事”が起こった時、誰が責任を持つのか、あるいは前に進めて行くのかが不明でした。

私は、まず 3 役会議（会長、常務、事務局長）を設置し、そこで詳細な議論を行い、次に、課長会議（月 2 回）を設置し、そこで各課の持つ、課題、現状について報告させて全体を議論させることにしました。そのことで、他課の仕事についても理解させ“オール社協”という意識付けを行ってきました。

その一例として、社協が「スワン」というパン屋を経営し、A 型就労支援適用で障がい者を 6 名雇用しています。しかしながら、スワンを社会福祉協議会が運営しているという認識が全職員にあるかという疑問符がついてしまいます。そこで、朝、パンの焼きあがった 9 時～ 10 時の一時間、スワンの関係者（障がい者）と他課の職員が一緒にパンの袋詰め作業をすることで、障がい者との接点を設けました。そして、群馬クレインサンダーズ（プロバスケットボール、B リーグ）の試合日には、太田マルシェにスワンが出店し、知名度アップと外販の強化を行ってきました。併せて、太田市の一大イベントになっている、太田市スポレク祭においてもスワンを運営しているという意識付けを行ってきました。

■モチベーションの向上はポストの設置

現在、太田市社会福祉協議会は、会長、常務、事務局長、4 課、9 系の体制となり、行政管理公社の職員の 40 パーセント抱える組織となっています。そして、太田市の福祉のセーフティーネットを担う重要な仕事をしています。

今、社会的に問題になっている成年後見についても、いち早く法人後見に取り組んでいますし、高齢化の中で、独居老人の孤独死対策については、ふれあい相談員（市の単独予算）を配置し、75 歳以上の単身世帯を専門に見守る施策を進めています。

市長が交代しても、この施策の後退は許されません。

太田市社会福祉協議会職員一丸となって、太田市の福祉の前進と、セーフティーネットとしての機能を果たしていかなければなりません。



2025 年 4 月 1 日現在

